

大平勤王讀本全
記鈔

特 259

898

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 0m 1 2 3 4 5

始



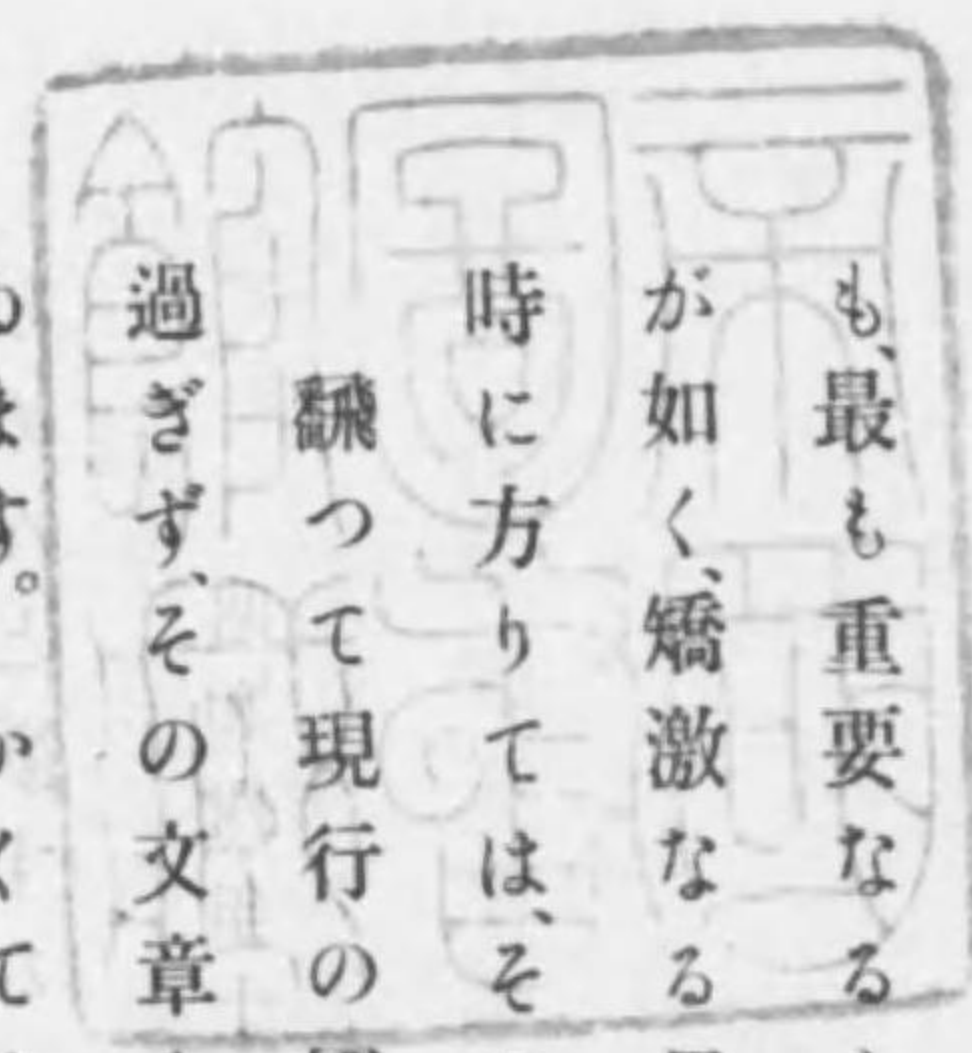
特259
898

抄記平太
勤王讀本

編部輯編店書川立

兌發店書川立

はしがき



國民性の陶冶と民族精神の涵養とは、國語教育の擔ふべき使命の中でも最も重要なものであらねばなりません。殊に現下の我國に於けるが如く、矯激なる思想と輕浮なる風潮とが滔々として世に蔓らんとする時に方りては、その使命の更に切實なるを痛感するのであります。纏つて現行の國語讀本を見るに、その多くは所謂標本的文章の羅列に過ぎず、その文章も亦やゝもすれば藝術的作品に偏するの傾向を示してゐます。かくては、重大なる國語教育の任務を全うする上に、大いなる片手落の生ぜんことを恐るゝのであります。本書は、これらの缺陷を補ひ上述の趣旨に副はんがために中等學校二三學年用副讀本として編纂せしものでありまして、その材料は、祖先の熱

血脈動せる戦記文中に之を選び、興味ある説話と連關せる史實とに依つて、天步艱難の際に於ける幾多勤王の志士の壯烈なる意氣に觸れしめ、強き感激と深き印象とを與へて、我民族の忠勇剛健なる傳統的精神を甦らしめんと欲するのであります。

昭和四年十二月

編者しるす

太平記
勤王讀本

目次

一	後醍醐天皇御治世	一
二	俊基朝臣の東下り	五
三	俊基朝臣の最後	九
四	阿新丸	一四
五	笠置の御夢	二五
六	笠置御没落	二九
七	赤坂城の戦	三四

目次

一

八 隱岐御還幸……………四四

九 兒島高德……………四六

一〇 大塔宮熊野落……………五〇

一一 天王寺の戦……………五六

一二 天王寺未來記……………六一

一三 吉野の城軍……………六四

一四 千劔破城の軍……………七三

一五 船上の行幸……………八四

一六 船上合戦……………九五

一七 稻村崎……………九六

一八 御還幸……………一〇一

一九 正成兵庫へ参向……………一〇一

二〇 尊氏東上 櫻井の訣別……………一〇三

二一 湊川の血戦……………一〇

二二 正成が首故郷に送らる……………一四

二三 吉野御潛幸……………一七

二四 後醍醐天皇崩御……………二三

二五 義貞の自害……………二五

二六 藤井寺の合戦……………三二

二七 住吉の合戦……………三四

二八 正行吉野へ参向……………四一

二九 四條畷の合戦……………四五

三〇 正行の最期……………五九

太平記 勤王讀本

一 後醍醐天皇御治世

後醍醐天皇
御諱は尊治、後宇多天皇の第二皇子。

濫觴

物の始、江始出三峴山、其源可三以濫觴、(孔子家語)

元曆年中

後鳥羽天皇元曆二年、即ち文治元年(一八四五)

爰に本朝人皇の始、神武天皇より九十六代の帝、後醍醐天皇の御宇に當つて、武臣相摸守平高時といふ者あり。この時上、君の徳に乖き、下、臣の禮を失ふ。これより四海大いに亂れて、一日も未だ安からず、狼煙天を翳め、鯨波地を動かすこと、今に至るまで四十餘年、一人として春秋に富めることを得ず、萬民手足を措く所なし。

つらく、その濫觴を尋ねれば、啻に禍一朝一夕の故にあらず。元曆年中に鎌倉の右大將頼朝卿平家を追討してその功ありし時、後白河院叡感の餘りに、六十六箇國の總追捕使に補せらる。これより武家始めて諸國に守護を立て、莊園に地頭を置く。かの頼朝の長男左



衛門督頼家次男右大臣實朝公相繼いで皆征夷將軍の武將に備はる。これを三代將軍と號す。然るに頼家卿は實朝の爲に討たれ。實朝は頼家の子惡禪師公曉が爲に討たれて父子三代僅に四十二年にして盡きぬ。その後頼朝卿の舅遠江守平時政の子息前陸奥守義時、自然に天下の權柄を執り、勢漸く四海を覆はんとす。この時太上天皇は後鳥羽院にておはす。武威下に振はゞ朝憲上に廢れんことを歎き思召して、義時を滅さんとし給ひしに、承久の亂出で來て、天下暫くも靜かならず、遂に旌旗日を掠めて、宇治勢多に相戦ふ。その戦未だ一日も終へざるに、官軍忽ちに敗北せしかば、後鳥羽院は隱岐の國へ遷されさせ給ひて、義時いよ／＼八荒を掌に握る。それより後、武藏守泰時、修理亮時氏、武藏守經時、相摸守時頼、左馬權頭時宗、相摸守貞時相繼いで七代政武家より出でて、德窮民を撫するに足れり。威萬人の上に被るといへども、位四品の際を越えず。謙に居て仁恩を施し

後鳥羽院
第八十二代の天皇

高しといへども云々

征夷將軍

藤原頼朝
宗尊親王
惟康親王
久明親王
守邦親王

兩人

兩六波羅

永仁元年

鎮西に云々

己を責めて禮儀を正す。是を以て高しといへども危からず、盈てりといふとも溢れず。承久より以來、諸王攝家の間に理世安民の器に相當り給へる貴族を一人鎌倉へ申下し奉りて、征夷將軍と仰いで、武臣皆拜趨の禮を事とす。同三年に、始めて洛中に兩人の一族を居ゑ、兩六波羅と號して、西國の沙汰を執り行はせ、京都の警衛に備へらる。又永仁元年より鎮西に一人の探題を下し、九州の成敗を司らしめ、異賊襲來の守を堅うす。されば一天下普く彼の下知に従はずと云ふ處もなく、四海の外も齊しくその權勢に服せずと云ふ者はなかりけり。朝陽犯さずとも殘星光を奪はるゝ習なれば、必ずしも武家より公家を蔑にし奉るとしもはなけれども、所には地頭強うして領家は弱く、國には守護重うして國司は輕し。この故に朝廷は年々に衰へ、武家は日々に盛なり。

これに因つて代々の聖主、遠くは承久の宸襟を休めんがため、近く

衛の懿公
狄人伐衛懿公好鶴鶴有乘軒者特戰國人受甲者皆曰使鶴鶴實有祿位余焉能戰
(左傳第四)

秦の李斯
李斯出獄與其
 中子俱執謂
 其中子曰吾
 欲與若復牽
 黃犬俱出上
 東門逐狡兔
 豈可得乎遂
 父子相笑而
 夷三
族(史記)

は朝儀の陵廢を歎き思召して、東夷を滅さばやと常に叡慮を運らさ
 れしかども、或は勢微にしてかなはず、或は時未だ到らずして、もだし
 給ひける處に、時政九代の後胤、前相摸守平高時入道崇鑑が代に至り
 て、一門當に亡びぬべき危機こゝに顯れたり。つらく、古を引き
 今を視るに、行跡甚だ軽くして人の嘲を顧みず、政道正しからずして
 民の弊を思はず、只日夜に逸遊を事として、前烈を地下に辱しめ、朝暮
 に奇物を翫びて、傾廢を生前に致さんとす。衛の懿公が鶴を乗せし
 樂はや盡き、秦の李斯が犬を牽きし恨今に來りなんとす。見る人眉
 を顰め、聽く人唇を翻す。この時の帝後醍醐天皇と申し、は、後宇多
 院の第二の皇子、談天門院の御腹にておはせしを、相摸守が計らひと
 して、御年三十一の時御位に即け奉る。御在位の間内には三綱五常
 の儀を正しうして、周公孔子の道に順ひ、外には萬機百司の政怠り給
 はず、延喜天曆の跡を追はれしかば、四海風を望みてよろこび、萬民德

談天門院
藤原忠繼の女高
 子。

延喜
醍醐天皇の御
 代。

天曆
村上天皇の御
 代。

禪律
禪宗と律宗、
 顯密

顯密
天臺宗と眞言
 宗。

に歸して楽しむ。凡そ諸道の廢れたるを興し、一事の善をも賞せら
 れしかば、寺社禪律の繁昌、爰に時を得、顯密儒道の碩才も皆望を達せ
 り。誠に天に受けたる聖主、地に奉ぜる明君なりと、其德を稱し、其化
 に誇らぬ者は無かりけり。

二 俊基朝臣の東下り

俊基朝臣は、先年土岐十郎頼貞が討たれし後、召捕られて、鎌倉まで
 下り給ひしかども、様々に陳じ申されし趣、實にもとて赦免せられた
 りけるが、又今度の白狀どもに、専ら陰謀の企、かの朝臣にありと載せ
 たりければ、七月十一日に又六波羅へ召捕られて、關東へ送られ給ふ。
 再犯赦さざるは法令の定むる所なれば、何と陳ずるとも許されじ、路
 次にて失はるゝか、鎌倉にて斬らるるか、二つの間をば離れじと思ひ
 まうけてぞ出でられける。

七月十一日
 元弘元年(一九
 九一)

交野

河内國、北河内郡にあり。
紅葉の錦着てあさまだき嵐の山の寒ければ、紅葉の錦着ぬ人ぞなき。(拾遺集)

逢阪關

京都より近江へ越ゆる所にあリ、有名なる清水湧き出づ。
逢阪の關の清水に袖ぬれて、今やひくらん望月の駒。(拾遺集)

打出の濱

琵琶湖畔にあリ。
世をうねの野に

近江路を朝立ちくればうねの野に、田鶴ぞ鳴くなる明けぬこの夜は。(古今集)

森山

近江國。白露も時雨もいたくもり山の、下葉残らず色つきにけり。(古今集)

篠原

近江國。鏡の山。森山の東北。老蘇の森

近江國。番場・醒井・柏原

何れも近江國。不破の關屋

美濃國。熱田・鳴海潟

何れも尾張國。濱名の橋

近江國。池田の宿

天龍川の岸にあリ。小夜の中山

遠江の國。命なりけり

年たけてまた越ゆべしと思ひきや、命なりけり。小夜の中山(新古今集)

落花の雪に踏迷ふ交野の春の櫻狩紅葉の錦を着て歸る嵐の山の秋の暮一夜をあかす程だにも旅寝となればものうきに恩愛の契淺からぬわが故郷の妻子をば行方も知らず思ひ置き年久しくも住馴れし九重の帝都をば今を限と顧みて思はぬ旅に出でたまふ心の中ぞあはれなる。

憂きをばとめぬ逢坂の關の清水に袖濡れて末は山路を打出の濱沖を遙かに見渡せば鹽ならぬ海にこがれ行く身をうき船の浮き沈み。駒もとゞろと踏みならず勢多の長橋打渡り行きかふ人にあふみぢや世をうねの野に鳴く鶴も子を思ふかとあはれなり。時雨もいたくもり山の木の下露に袖ぬれて風に露散る篠原や篠分くる道を過ぎゆけば鏡の山はありとても涙に曇りて見えわかず。物を思へば夜の間にもおいそのもりの下草に駒を留めて顧みる故郷を雲や隔つらん。

番場醒ヶ井柏原 不破の關屋は荒れはて、猶もるものは秋の雨いつかわがみのをはりなる熱田の八劍ふし拜み汐干に今やなるみがた。傾く月に道見えて明けぬ暮れぬと行く道の末は何處ととほたふみ濱名の橋の夕汐に引く人もなき捨小舟沈みはてぬる身にしあれば誰かあはれとゆふぐれの晚鐘鳴れば今はとて池田の宿に着き給ふ。

旅館の燈幽かにして雞鳴曉を催せば、匹馬風に嘶えて天龍川を打渡り、さやの中山越行けば、白雲路を埋み來て、そことも知らぬ夕暮に、家郷の天を望みても昔西行法師が「命なりけり」と詠じつゝ二度越えし跡までも羨しくぞ思はれける。隙行く駒の足早み、日已に亭午にのぼれば、餉進らす程とて輿を庭前に昇きとゞむ。轅を叩きて警固の武士を近づけ、宿の名を問ひ給ふに、「菊川と申すなり」と答へければ、承久の合戦の時、院宣書きたりし咎に因りて、宗行卿關東へ召

下されしが、此の宿にて誅せられし時、

昔南陽縣菊水、汲下流而延齡。

今東海道菊川、宿西岸而終命。

と書きたりし遠き昔の筆の跡、今はわが身の上になり、あはれやいとゞまさりけん、一首の歌を詠みて宿の柱にぞ書かれける。

いにしへもかゝるためしをきく川の

おなじながれに身をやつしづめん。

大井川を過ぎたまへば、都にありし名を聞きて、龜山殿の行幸の嵐の山の花ざかり龍頭鷁首の船に乗り、詩歌管絃の宴に侍りしことも今は二度見ぬ夜の夢となりぬと思ひ續け給ふ。島田・藤枝にかゝりて、岡邊の眞葛裏枯れて物悲しき夕暮に、宇都の山邊を越行けば、蔦かづらいと茂りて道もなし。昔業平の中將の住む所を覓むとて、東の方を下るとて、「夢にも人に逢はぬなりけり」と詠みたりしも、かくや

菊川

遠江國

承久の合戦

院武家征伐を企てられしに依りて起る。

南陽縣

支那南陽縣にあり、谷水仕し。

上に菊水ありて水を落つ。これを汲む者、延

大井川

遠江と駿河との界にあり。

京都桂川の上流をも大堰川といふ。

龜山殿

大堰川の邊にあり。

島田・藤枝

駿河國

岡邊

藤枝と丸子との間にあり。

宇都の山

駿河國

夢にも人に

駿河なる宇津の山邊のうづみに、夢にも、人に逢はぬなりけり。(伊勢物語)

清見潟

駿河の海邊、昔關所ありたり。

美穂崎・興津・蒲原

駿河國

上なきおもひ

富士のわの煙はなほそちのぼる、上なきものはおもひなりけり。(新古今集)

ありたつ田子

袖ぬるゝ懸路とかつは知りながら、おりのみづからぞうき。(源氏物語)

田子の浦

清見・興津より東浮島ヶ原までの海邊なり。

車返

駿河國

竹の下道

富士の裾野にあり。

と思ひ知られたり。清見潟を過ぎ給へば都に歸る夢をさへ通さぬ波の關守にいとゞ涙を催され、向ふはいづこみほが崎。興津・蒲原打過ぎて富士の高嶺を見たまへば、雪の中より立つ煙、上なきおもひに比べつゝ、明くる霞に松見えて浮島が原を過行けば、汐干や淺き船浮きて、おりたつ田子のみづからも浮世をめぐる車返。竹の下道行きなやむ足柄山の峠より大磯・小磯見下して、袖にも波はこゆるぎのいそぐとしもはなけれども、日數つもれば七月二十六日の暮程に、鎌倉にこそは着きたまひけれ。

三 俊基朝臣の最後

俊基朝臣は殊更に謀叛の張本なれば、遠國に流すまでもあるべからず、近日に鎌倉中にて斬り奉るべしとぞ定められける。此の人多年の所願ありて、法華經を六百部自ら讀誦し奉るが、今二百部残りけ

足柄山 愛鷹山のこと。
大磯 相模國の海邊。
小磯 こゆるぎ
小餘越の磯あり。

るを六百部に滿つるほどの命を相待たれ候ひて、其の後兎も角もなされ候へ。」と、頻に所望ありければ、「實にも其の大願を果させ奉らざらんも罪なり。」とて、今二百部の終る程僅の日數を待暮す命の程こそあはれなれ。

此の朝臣の多年召し使ひける青侍に後藤左衛門尉助光といふ者あり。主の俊基召捕られ給ひし後、北の方に付き進らせ、嵯峨の奥に忍びて候ひけるが、俊基關東へ召し下され給ふよしを聞き給ひて北の方は堪へぬ思ひに伏し沈みて歎き悲しみ給ひけるを見奉るに、悲に堪へずして、北の方の御文をたまひて、助光忍びて鎌倉へぞ下りける。今日明日の程と聞えしかば、今ははや斬られもやし給ひつらんと行き逢ふ人に事のよしを問ひ問ひ、程なく鎌倉にこそ着きにけれ。右少辨俊基のおはする傍に宿を借りて、いかなる便もがな、事の仔細を聞き入れんと伺ひけれども、かなはずして日を過しける處に、「今日

粧坂 鎌倉の扇谷より四へ出づる所にあり。

右少辨殿 俊基朝臣。

仔細候ふまじ さしつかへありますまい。

こそ京都よりの囚人は斬られ給ふべきなれ、あな哀れや、なんと沙汰しければ、助光こはいかゞせんと肝を消し、こゝかしこに立ちて見聞しければ、俊基已に張輿に乗せられて、（註）粧坂へ出で給ふ。此處にて工藤二郎左衛門尉請取りて、葛原岡に大幕引きて敷皮の上に坐し給へり。是を見ける助光が心中、譬へて言はん方もなし。目くれ足もなえて絶え入るばかりにありけれども、泣く／＼工藤殿が前に進み出でて、「是は右少辨殿の伺候の者にて候が、最後の様見奉り候はんため、に遙々と参り候。然るべくは御免を蒙りて御前に参り、北の方の御文をも見参に入れ候はん。」と申しもあへず、涙をはら／＼と流しければ、工藤も見ると哀を催されて不覺の涙せきあへず、「仔細候ふまじ早幕の内へ御参り候へ。」とぞ許しける。

助光幕の内に入りて御前に跪く。俊基は助光を打見て、「いかにや。」とばかり宣ひて、やがて涙に咽び給ふ。助光も、「北の方の御文に候ふ。」

とて、御前に差置きたるばかりにて、是も涙にくれて顔をも持ち上げず泣き居たり。や、暫くありて俊基涙を押拭ひ文を見給へば、「消えかゝる露の身の置所なきにつけても、如何なる暮にか、なき世の別れと承り候はんずらんと、心を摧く涙のほど、御推量もなほ淺くなん」と、詞に餘りて思ひの色深く、黒み過ぐるまで書かれたり。俊基いとゞ涙にくれて、讀みかね給へる氣色、見る人袖をぬらさぬはなかりけり。「硯やある」と宣へば、矢立を御前に差置けば、硯の中なる小刀にて鬢の髪を少し押切つて、北の方の文に巻きそへ、引返し一筆書きて助光が手に渡し給へば、助光懐に入れて泣沈みたる有様、理にも過ぎて哀なり。工藤左衛門幕の内に入りて、「餘に時の移り候」と勸むれば、俊基疊紙（ふところ紙）を取出し頸のまほりを押拭ひ、其の紙を推披きて辭世の頌（うた）を書き給ふ。

古來一句。無死無生。

萬里雲盡。長江水清。

筆を擱きて鬢の髪を撫で給ふ程こそあれ、太刀かげ後に光れば首は前に落ちけるを、自ら抱へて伏し給ふ。是を見奉る助光が心の中譬へていはん方もなし。

さて泣くく死骸を葬し奉り、空しき遺骨を頸に懸け形見の御文身に副へて泣くく京へぞ上りける。北の方は助光を待ちつけて、辨殿の行方を聞かんことの嬉しさに、人目も憚らす簾より外に出迎へ、「いかにや辨殿は、いつごろに御上りあるべしとの御返事ぞ」と問ひ給へば、助光はらくと涙をこぼして、「はや斬られさせ給ひて候、是こそ今はの際の御返事にて候へ」とて、鬢の髪と消息とをさしあげて聲も惜まず泣きければ、北の方は形見の文と白骨とを見給ひて、内へも入り給はず縁に倒れ伏し、消え入り給ひぬと驚く程に見え給ふ。理なるかな、一樹の蔭に宿り一河の流を汲む程も、知られず知らぬ

辨殿
右少辨俊基朝臣。

一樹の蔭に云々
宿一樹下、波一河流、一夜同宿、一日夫妻、皆是先世結縁、(説法明眼論)

疊紙
ふところ紙。
はながみ。

連理の契

兩株の木の幹又は枝の本理が連りて一つとなる如く堅き契り、多く夫婦間に言ふ。在天願作二世翼鳥、在地願爲連理枝。(白居易、長恨歌)

人にだに別となれば名残を惜む習なるに、況や連理の契淺からずして十年あまりになりぬるに、夢より外は又も相見ぬ此の世の外の別と聞きて、絶入り悲み給ふぞことわりなる。
四十九日と申すに形の如く佛事營みて北の方様をかへ濃き墨染に身をやつし柴の扉の明暮は亡夫の菩提をぞ弔ひ給ひける。助光も髪切つて永く高野山に閉籠つて、偏に亡君の後生菩提をぞ弔ひ奉りける。夫婦の契君臣の義なきあとまでも留りて哀なりしことどもなり。

四阿新丸

君

後醍醐天皇。

君の御企てを申勸めけるは、源中納言具行、右少辨俊基、日野中納言資朝なり、各死罪に行はるべしと評定一途に定まりて、先づ去年より佐渡の國へ流されておはする資朝卿を斬り奉るべし」と、その國の守護本間山城入道に下知せらる。

この事京都へ聞えければ、この資朝の子息邦光の中納言、その頃は阿新殿とて、歳十三にておはしけるが、父の卿囚人になり給ひしより、仁和寺邊に隠れて居られけるが、父誅せられ給ふべきよしを聞きて、「今は何事にか命を惜しむべき、父と共に斬られて冥途の旅の件をもし、また最期の御有様をも見奉るべし」とて母に御暇をぞ乞はれける。

母御頼りに諫めて、「佐渡とやらんは人も通はぬ怖しき島とこそ聞ゆれ。日數を経る道なれば、いかにしてか下るべき。その上汝にさへ離れては、一日片時も命存ふべしとも覺えず」と泣悲しみて止めければ、「よしや伴ひ行く人なくば、いかなる淵瀬にも身を投げて死なんと申しける間、母いたく止めなば、又目の前に憂き別もありぬべしと思ひ侘びて、力なく今まで只一人附副ひたる中間を相副へて、遙々と

仁和寺

山城國葛野郡花岡村字御室、京都の北西。

中間

侍と小者との間に位する武家の召使。

佐渡の國へぞ下されける。

路遠けれども乗るべき馬もなければ履きも給はぬ草鞋に菅の小笠を傾けて露分くる越路の旅思ひやるこそ哀なれ。都を出でて十日あまりと申すに越前の敦賀の津に着きにけり。これより商人船に乗りて、ほどなく佐渡の國にぞ着きにける。人してかうといふべき便もなければ自ら本間が館に到つて、中門の前にぞ立ちたりける。折節僧のありけるが立出で、「この内への御用にて御立ち候か。またいかなる用にて候ぞ。」と問ひければ、阿新殿、「これは日野中納言の子にて候が、この頃斬られさせ給ふべしと承つて、その最期の様を見候はんために、都より遙々と尋ね下つて候。」といひもあへず、涙をはらはらと流しければ、この僧心ありける人にて、急ぎこの由を本間に語るに、本間も岩木ならねば、さすがあはれにや思ひけん、この僧を以て持佛堂に誘ひ入れて踏皮行纏解かせ足洗ひて、疎かならぬ體にてぞ置きたりける。

持佛堂
自分の持佛又は祖先の位牌を安置する佛堂。
行纏
脚絆。

よみぢ
黄泉、魂の行く死、魂の行く世界への道。

阿新殿これを嬉しと思ふにつけても、同じくは父の卿を疾く見奉らばや、といひけれども、今日明日斬らるべき人にこれを見せては、なか／＼よみぢの障ともなりぬべし。また關東の聞えも如何あらんずらん。とて、父子の對面を許さず、四五町隔たりたるところに置きたれば、父の卿は之を聞きて、行末も知らぬ都に如何あらんと思ひやるよりなほ悲し。子はその方を見やりて、浪路遙かに隔たりし鄙の住居を思ひやりて心苦しく思ひつる涙は更に數ならずと、袂の乾くひまもなし。是こそ中納言のおはします牢の中よとて見やれば、竹の一むら茂りたるところに堀ほり廻らし、塀塗りて、行き通ふ人も稀なり。情なの本間が心や、父は禁牢せられ、子は未だ稚し、たとひ一所に置きたりとして、何程の怖かあるべきに、對面をだに許さず、まだ同じ世の中ながら、生を隔てたる如くにて、亡からん後の苔の下、思ひ寢に見ん夢

生を隔てたる
この世と、あの世とに別れてゐる。

ならでは相見んこともありがたしと、互に悲しむ恩愛の父子の道こそあはれなれ。

五月二十九日
元弘二年。

五月二十九日の暮ほどに、資朝卿を牢より出し奉りて、遙かに御湯も召され候はぬに御行水候へ」と申せば、はや斬らるべき時になりけりと思ひ給ひて、「嗚呼、うたてしきことかな。我が最期の様を見んために遙々と尋ね下りたる幼きものを、一目も見ずして果てぬることよ。」とばかり宣ひて、その後は曾て諸事につけて言葉をも出し給はず。今朝までは氣色しをれて、常には涙を押拭ひ給ひけるが、人間のことに於ては頭燃を拂ふ如くになりぬと覺つて、たゞ綿密の工夫の外は餘念ありとも見え給はず。夜に入れば輿さし寄せ乗せ奉りこゝより十町ばかりある河原へ出し奉り、輿昇きすゑたれば少しも臆したる氣色もなく、敷皮の上に居直つて、辭世の頌を書き給ふ。

五蘊假成、形 四大今歸空。

頭燃を云々

譬如男女有火
燒頭教令速
滅。(補註天臺
三大部)

五蘊
色受想行識。

四大

地水火風。

將首當白刃、截斷一陣風。

年號・月日の下に名字を書きつけて、筆を擱き給へば、斬手後へ廻るとぞ見えし。御首は敷皮の上に落ちて、體はなほ坐せるが如し。このほど常に法談などし給ひける僧來りて、葬禮式の如く取營み、空しき骨を拾うて阿新に奉りければ、阿新これを一目見て、取る手もたゆく倒れ伏し、「今生の對面途に叶はずして、變れる白骨を見ることよ。」と泣悲しむも理なり。

阿新未だ幼稚なれども、健氣なる所存ありければ、父の遺骨をばただ一人召使ひける中間に持たせて、「まづ我より先に高野山に參りて、奥の院とかやに納めよ。」とて、都へ歸し上せ、我が身は勞ることあるよしにて、なほ本間が館にぞ留りける。これ本間が情なく父を今生にて我に見せざりつる鬱憤を散ぜんと思ふ故なり。かくて四五日経けるほどに、阿新晝は病のよしにてひねもす臥し、夜は忍びやかに抜

勞ること

病氣。

出でて、本間が寢處など細々とうかがうて、隙あらばかの入道父子が間に一人さし殺して、腹切らんずるものと思ひ定めてぞ狙ひける。

遠侍

武家の邸にて、中門の傍にある廊の如き處、番の侍此處に居る。

或夜雨風烈しく吹きて宿直する郎黨ども皆遠侍に臥したりければ、今こそ待つところの幸よと思ひて、本間が寢處の方を忍びて窺ふに本間が運や強かりけん、今夜は常の寢處を變へて、いづくにありとも見えぬ。また二間なる處に燈の影の見えけるを、これは若し本間入道が子息にてやあらん、それなりとも討ちて恨を散せんと、抜け入りてこれを見るに、それさへ爰になくして、中納言殿を斬り奉りし本間三郎といふものぞたゞ一人臥したりける。よしや是も時にとつては親の敵なり、山城入道に劣るまじと思ひて、走りかゝらんとするに、我は元來太刀も刀も持たず、たゞ人の太刀を我が物と憑みたるに、燈殊に明らかなれば、立寄らばやがて驚き合ふこともやあらんずら

左右なく

たやすく。

明障子

今の障子。

究竟

この上ない好都合。

んと危みて、左右なく寄り得ず、如何せんと案じ煩ひて立ちたるに折節夏なれば、燈の影を見て、蛾といふ蟲の數多明障子に取りつきたるを、すはや究竟のことこそあれと思ひて、障子を少し引きあげたれば、この蟲數多内へ入つて、やがて燈を打消しぬ。今はかうと嬉しくて、本間三郎が枕に立寄りて探るに、太刀も刀も枕にあつて、主はいたく寝入りたり。まづ刀を取つて腰にさし、太刀を抜いて胸元に當て、寝たるものを殺すは死人を斬るに同じければ驚かさんと思ひて、まづ足にて枕をはたとぞ蹴たりける。蹴られて驚くところを、一の太刀に臍の上を疊までつと突通し、返す太刀に喉笛さし切つて、心靜かに後の竹原の中にぞ隠れける。

本間三郎が一の太刀に胸を通されて、「あつ」といふ聲に番衆ども驚き騒いで、火を點してこれを見るに、血のつきたる小さき足跡あり。「さては阿新殿の仕業なり。堀の水深ければ、木戸より外へはよも出

落ちて見ばや
逃げのびて見た
い。

でじ、搜し出だして打殺せ。」とて、手にく松明を點し、木の下、草の蔭まで残る處なくぞ搜しける。阿新は竹原の中に隠れながら、今はいづくへか遁るべき、人手にかゝらんよりは自害をせばやと思はれけるが、憎しと思ふ親の敵をば打ちつ、今はいかにもして、命を全うして、君の御用にも立ち父の素志をも達したらんこそ、忠臣孝子の義にてもあらんずれ、若しやと一まづ落ちて見ばやと思ひ返して、堀を飛び越えんとしけるが、巾二丈深さ一丈に餘りたる堀なれば越ゆべきやうもなかりけり。さればこれを橋にして渡らんよと思ひて、堀の上にもなかりたる吳竹の梢へさらく」と登りたれば、竹の末堀の向ふへ靡き伏して、やすくと堀をば越えてけり。夜は未だ深し、湊の方へ行きて、船に乗りてこそ陸へは着かめと思ひて、辿るく浦の方へ行くほどに、夜は早や次第に明離れて忍ぶべき道もなければ、身を隠さんとして日を暮し、麻や蓬の生ひ茂りたる中に隠れ居たれば、追手どもと

思しきものごも百四五十騎馳散つて、若し十二三ばかりなる兒や通りつる。」と道に行きあふ人毎に問ふ音してぞ過行きける。

阿新その日は麻の中にて日を暮し、夜になれば湊へと志して、そことも知らず行くほどに、孝行の志を感じて佛神擁護の眸まなこをやめぐらされけん、年老いたる山伏一人行逢ひたり。この兒の有様を見て痛はしくや思ひけん、「これはいづくよりいづくをさして御渡り候ぞ。」と問ひければ、阿新事の様をありのまゝにぞ語りける。山伏これと聞いて、我この人を助けずば、只今の程にかはゆき目を見るべしと思ひければ、「御心安く思召され候へ、湊に商人船ども多く候へば乗せ奉りて、越後・越中の方まで送りつけ進らすべし。」といひて足たゆめば此の兒を肩に乗せ、背に負うて、程なく湊にぞ着きにける。

夜明けて「便船やある。」と尋ねけるに、折節の湊の内には船一艘もなかりけり。如何せんと求むるところに、遙かの沖に乗り浮べたる大

山伏
山野に起臥して
修行する僧。

柿の衣の露

柿色の衣の露。

露とは袖くまりの緒の垂れたる

編。

山伏の先達これ

を着す。

いらたか數珠

平たいつぶの念

珠。

明王

不動明王。

船順風になりぬと悦びて櫓を立て篷を捲く。山伏手を擧げて、その船これへ寄せてたび給へ。便船申さん」と呼ばはりけれども、曾て耳にも聞き入れず、船人聲を帆に上げて湊の外へ漕出す。山伏大きに腹を立て、柿の衣の露を結んで肩にかけ、沖行く船に立向つて、いらたか數珠をおし揉んで、明王の本誓誤らずば、その船此方へ漕ぎ返してたばせ給へ」と跳り上り跳り上り肝膽を碎いてぞ祈りける。行者の祈神に通じて、明王擁護やし給ひけん、沖の方より俄に悪風吹き來つて、この船忽ち覆らんとしける間、船人どもあわてて、山伏の御坊まづ我等を御助け候へ」と手をあはせ膝を屈め、手に手に船を漕戻す。汀近くなりければ、船頭船より飛下りて、兒を肩に乗せ山伏の手を引き、屋形の内に入れたれば、風はもとの如くに直りて、船は湊を出でにけり。

その後追手ども百四五十騎馳來り、遠淺に馬を控へて、あの船止め。」

と招けども、船人これを見ぬよしにて、順風に帆を揚げたれば、船は其の日の暮程に、越後の府にぞ着きにける。

五 笠置の御夢

王上

後醍醐天皇。

手勢打たせたる大名

手勢をひきつれた大名。

三公

太政大臣、左大臣、右大臣。

元弘元年八月二十七日、主上笠置へ臨幸成つて本堂を皇居と定めらる。始め一兩日の程は武威に恐れて、参り仕ふる人一人もなかりけるが、叡山東坂本の合戦に、六波羅勢うち負けぬと聞えければ、當寺の衆徒を始めて、近國の兵ども此處彼處より馳せ参る。されども未だ名ある武士、手勢百騎とも二百騎とも打たせたる大名は一人も参らず。此の勢ばかりにては、皇居の警固如何あるべからんと、主上思召し煩はせ給ひて、少し御まどろみありける御夢に、所は紫宸殿の庭前と覺えたる地に、大なる常盤木あり。緑の蔭茂りて南へ指したる枝殊に榮え蔓れり。其の下に三公百官位に依つて列座す。南へ向

びんづら
みづらに同じ。
頂の髪を左右に
分ける結び方。
後世のあげまき
に類す。

南面の徳
天子の徳。
聖人南面而聽
天下。謂明而
治。(易經)
日光月光
菩薩の名。共に
藥師如來の二脇
士なり。

きたる上座に、御座の疊を高く敷き、未だ座したる人はなし。主上御夢心地に、誰を設けんための座席やらん。と怪しく思召して、立たせ給ひたる處に、びんづら結ひたる童子二人忽然として來つて、主上の御前に跪き、涙を袖にかけて、二天下の間に暫くも御身を隠さるべき所なし。但しあの樹の蔭に南へ向へる座席あり。是御爲に設けたる玉座にて候へば、暫くこれに御坐し候へ。と申して、童子は遙かの天に上り去りぬと御覽じて、御夢はやがて覺めにけり。

主上是は天の朕に告ぐる所の夢なりと思召して、文字につきて御料簡あるに、木に南と書きたるは楠といふ字なり。其の蔭に南に向うて坐せよと、二人の童子の教へつるは、朕再び南面の徳を治めて天下の士を朝せしめんずる處を、日光月光の示されけるよと、自ら御夢を合せられて、たのもしくこそ思召されけれ。

夜明けければ當寺の衆徒、成就房の律師を召され、若し此の邊に楠

敏達天皇
第三十代。

志貴

大和國にあり。
本尊は毘沙門
天。

藤房卿

姓は藤原。弟季
房と共に後醍醐
天皇をお授け申
上げた。

と云はるゝ、武士や有る。と、御尋ねありければ、近きあたりに左様の名字附きたる者ありとも未だ承り及ばず候。河内國金剛山の西にこそ、楠多門兵衛正成とて、弓矢取つて名を得たる者は候ふなれ。是は敏達天皇四代の孫、井手左大臣橋諸兄公の後胤たりといへども、民間に下つて年久し。其の母若かりし時、志貴の毘沙門に百日詣で、夢想を感じて設けたる子にて候とて、幼名を多門とは申し候なり。とぞ答へ申しける。主上、さては今夜の夢の告これなりと思召して、頓て是を召せ。と仰下されければ、藤房卿勅を奉りて、急ぎ楠正成をぞ召されける。

勅使宣旨を帶して、楠が館へ行き向うて、ことの仔細を述べられければ、正成弓矢取る身の面目何事か是に過ぎじと思ひければ、是非の思案にも及ばず、先づ忍びて笠置へぞ参じける。主上萬里小路中納言藤房卿を以て仰せられけるは、東夷征罰の事、正成を憑み思召さる

る仔細あつて勅使を立てらるゝ所に、時刻を移さず馳せ参る條、叡感
 淺からざる所なり。抑、天下草創の事、如何なる謀を廻してか、勝つ事
 を一時に決して太平を四海に致さるべき、所存を殘さず申すべし。
 と勅諭ありければ、正成畏つて申しけるは、「東夷近日の大逆、唯天の
 譴を招き候上は、衰亂の弊に乗つて天誅を致されんに、何の仔細か候
 ふべき。但天下草創の功は、武略と智謀との二にて候。若し勢を合
 して戦はゞ、六十餘州の兵を集めて武藏・相摸の兩國に對すとも、勝つ
 ことを得がたし。若し謀を以て争はゞ、東夷の武力、唯利を摧き堅を
 破る内を出でず。是欺くに易くして怖るゝに足らざる所なり。合
 戦の習にて候へば、一旦の勝負をば必ずしも御覽せらるべからず。
 正成一人未だ生きてありと聞召され候はゞ、聖運遂に開かるべしと
 思召され候へ」と頼もしげに申して、正成は河内に歸りにけり。

六 笠置御没落

卿相
公卿や大臣、朝
 政に興る高官。
 雲客
殿上人。
 四位以上の公卿
 及六位の藏人に
 して宮中の殿上
 に昇ることを許
 されたる人。

さる程に類火東西より吹かれて、餘煙皇居にかゝりければ、主上を
 始めまゐらせて、宮々卿相雲客、皆歩あし跳はなる體にて、いづくを指すとも
 なく足に任せて落ち行き給ふ。此の人々、始め一二町が程こそ主上
 を扶け進らせて、前後に御伴をも申されたりけれ、雨風烈しく道闇く
 して、敵の鬨の聲此處彼處に聞えければ、次第に別れくになつて、後
 にはたゞ藤房・季房二人より外は、主上の御手を引き進らす人もな
 し。忝くも十善の天子、玉體を田夫野人の形に替へさせ給ひて、そこ
 とも知らず迷ひ出でさせ給ひける御有様こそあましけれ。
 如何にもして夜の内に赤坂の城へと、御心ばかりを盡されけれど
 も、假にも未だ習はせたまはぬ御歩行なれば、夢路をたどる御心地し
 て、一足には休み、二足には立ち止り、晝は道の傍なる青塚の蔭に御身

羅穀
うすもの。
絹のうすき布。

を隠させ給ひて、寒草の疎かなるを御座の茵とし、夜は人も通はぬ野原の露分け迷はせ給ひて、羅穀の御袖をほしあへず。とかうして夜晝三日に、山城多賀の郷なる有王山の麓まで落ちさせ給ひけり。藤房季房も三日まで口中の食を断ちければ、足たゆみ身疲れて、今は如何なる目に逢ふとも逃げぬべきこゝちせざりければ、せん方なくて、幽谷の岩を枕にて、君臣兄弟もろともにうつゝの夢に伏したまふ。梢をはらふ松の風を雨の降るかと思召して、木蔭に立ち寄りさせ給ひたれば、下露のはらくと御袖にかゝりけるを、主上御覽ぜられて、

さして行く笠置の山を出でしより

あめが下にはかくれがもなし

藤房卿涙をおさへて、

いかにせんたのもむ蔭とて立ちよれば

なほ袖ぬらす松の下つゆ

山城國の住人深須入道松井藏人二人は、此の邊の案内者なりければ、山々峯々残る所なく搜しける間、皇居隠れなく尋ね出されさせ給ふ。主上誠におそろしげなる御氣色にて、汝等心ある者ならば、天恩を戴いて私の榮華を期せよ。と仰せられければ、さしもの深須入道俄に心變じて、あはれ此の君を隠し奉つて義兵を擧げばやと思ひけれども、後に續ける松井が所存知り難かりける間、事の漏れ易くして道の成り難からん事を憚つて黙止しけるこそうたてけれ。俄かの事にて網代の輿だになかりければ、張輿の怪しげなるに扶け乗せ進らせて、先づ南都の内山へ入れ奉る。其の體たゞ殷湯夏臺に囚はれ、越王會稽に降ぜし昔の夢に異ならず。是を聞き是を見る人ごとに、袖をぬらさずといふ事無かりけり。

此の時こゝかしこにて、生捕られ給ひける人々には、先づ一宮中務

所存

心の中に考へて
あること。

網代の輿

竹の網代を外に
張りつけた輿。

内山

大和國山邊郡朝
和村大字柚之
内。

殷湯

殷の湯王、夏の
桀王のために夏
臺の獄にとらは
れたり。

越王

越王勾踐、吳王夫差と戦ひ敗れて會稽山に降服したり。然れども後に何れも復讐せり。

卿親王第二宮妙法院尊澄法親王花山院大納言師賢源中納言具行中納言藤房宰相季房等都合六十一人其の所從眷屬共に至るまでは計ふるに違あらず。或は籠輿に召させられ或は傳馬に乗せられて、白晝に京都へ入り給ひければ其の方様かと覺えたる男女街に立ち並びて人目をも憚らず泣き悲む。あさましかりつる有様なり。

十月二日
元弘元年。

關東の兩大將

大佛貞直。金澤貞將。

持明院

光嚴天皇。

内侍所
神鏡のことにて又實所とも申上ぐ。

十月二日六波羅の北の方常葉駿河守範貞三千餘騎にて路を警固仕つて、主上を宇治の平等院へ成し奉る。其の日關東の兩大將京へは入らずして、直に宇治へ参り向つて、龍顔に謁し奉り、先づ三種の神器を渡し給ひて、持明院新帝へ進らすべき由を奏聞す。主上、藤房を以て仰出されけるは、三種の神器は古より繼體の君位を天に受けさせ給ふ時、自らは是を授け奉るものなり。四海に威を振ふ逆臣あつて、暫く天下を掌に握る者ありといへども、未だ此の三種の重器を自ら專にせし例を聞かず。其の上内侍所をば笠置の本堂に置き奉りし

六波羅
常葉駿河守範貞のこと。

龍駕

天子の御輦。

袞衣

天子の服。卷龍の模様あり。

かば、定めて戦場の灰塵にこそ落ちさせ給ひぬらめ。神璽は山中に迷ひし時木の枝に懸け置きしかば、遂にはよも吾國の守とならせ給はぬことあらじ。寶劍は武家の輩若し天罰を顧みずして、玉體に近づき奉ることあらば、自ら其の刃の上に伏させ給はんために、暫くも御身を放たる事あるまじきなり。と仰せられければ、東使兩人も、六波羅も言葉なくして退出す。

翌日に龍駕を廻らして六波羅へ成し進らせんとしけるを、前々臨幸の儀式ならでは、還幸なるまじき由を強ひて仰出されける間、力なく鳳輦を用意し、袞衣を調進しける間三日まで平等院に御逗留あつてぞ、六波羅へは入らせ給ひける。日來の行幸に事變りて、鳳輦は數萬の武士に打ち圍まれ、月卿雲客はあやしげなる籠輿傳馬に扶け乘せられて、七條を東へ河原をのぼりて、六波羅へと急がせ給へば、見る人涙を流し、聞く人心を傷ましむ。悲しいかな昨日は紫宸北極の高

白屋 賤しき人の居所、又賤人の居

天上の五衰

天人の死せんとする時は五種の衰相を現す。一、經論の所説一ならざる。二、淫慾十九には命欲終。三、有命相現。四、二者衣上花萎。五、三者身下汗出。六、四者腋樂。七、本座。八、人間の一炊。九、人間のはかなき。十、鬚之夢と。十一、李泌の枕中記に出づ。

赤坂 河内國南河内郡にあり。

きに座して、百司禮儀の装をつくるひしに、今は白屋東夷の卑しきに下らせ給ひて、萬卒守禦の嚴しきに御心を惱ませらる。時移り事去り、樂盡きて悲來る。天上の五衰人間の一炊、唯夢かとのみぞ覺えたる。遠からの雲の上の御住居、いつしか思召し出だす御事多き折節、時雨の音一通り軒端の月に過ぎけるを聞召して、

住みなれぬ板屋の軒の村時雨

音を聞くにも袖はぬれけり

七 赤阪城の戰

遙々と東國より上りたる大勢ども、未だ近江國へも入らざる前に、笠置の城已に落ちければ、無念のことに思うて、一人も京都へは入らず。或は伊賀伊勢の山を經、或は宇治醍醐の道をよこぎつて、楠兵衛正成が立籠つたる赤坂の城へぞ向ひける。

籌を帷幄の中 夫運籌帷幄之中、決勝千里之外、吾不知如子房也。漢書高帝紀。子房は張良のこと。

張良・陳平

漢時代の智謀の將。

赤坂の戰

石川河原を打ち過ぎて城の有様を見遣れば、俄に拵へたりと覺えてはか／＼しく堀をもほらず、僅に塀一重塗つて、方一二町には過ぎじと覺えたる其の内に、櫓二三十が程掻き並べたり。是を見る人毎に、「あな哀の敵の有様や、此の城我等が片手に載せて投ぐるとも投げつべし。あはれせめて如何なる不思議にも、楠が一日こらへよかし、分捕高名して恩賞に預らん。」と思はぬ者こそなかりけれ。されば寄手三十萬騎の勢ども、打ち寄するとひとしく、馬を踏み放ち、堀の中に飛び入り、櫓の下に立ち竝んで、我先きに打ち入らんとぞ争ひける。正成は元來籌を帷幄の中にめぐらし、勝つ事を千里の外に決せんと、陳平・張良が肺肝の間より流出せるが如きの者なりければ、究竟の射手を二百餘人城中に籠めて、舍弟の七郎と和田五郎正遠とに三百餘騎を差し副へて、よその山にぞ置きたりける。寄手は是を思ひもよらず、心を一片に取りて、唯一揉みに揉み落さんと、同時に皆四方の

狭間

城の壁又は櫓など
に設くる窓、外
ならうかゞひ望
み、矢彈等をうち
出すためのもの。

魚鱗がかり

魚のうろこのな
らびたるやうに
順序正しく陣形
を作つて敵陣に
馬を進めること。

切岸の下に着いたりける處を櫓の上、狭間の蔭より、指しつめ引きつめ鎌を揃へて射ける間、時の程に手負死人千餘人に及べり。東國の勢ども案に相違して、「いや〜」此の城の爲體、一日二日には落ちまじけるぞ、暫く陣々を取りて役所を構へ、手分をして合戦をいたせ。」とて、攻口を少し引退き、馬の鞍をおろし、物具を脱いで皆帷幕の中にぞ休み居たりける。楠七郎・和田五郎、遙かの山より見下して、「時刻よし。」と思ひければ、三百餘騎を二手に分け、東西の山の木蔭より菊水の旗二旒松の嵐に吹き靡かせ、閑に馬を歩ませ、煙嵐を捲いて押し寄せたり。東國の勢是を見て、敵か味方かとためらひ怪む處に、三百餘騎の勢ども兩方より吶喊をどつと作つて、雲霞の如くにたなびきたる三十萬騎の中に、魚鱗がかりにかけ入り、東西南北へ破つて通り、四方八面を切つて廻るに、寄手の大勢あきれて陣をなしかねたり。城中より三の木戸を同時に颯と排いて、二百餘騎鋒を並べて打つて出で、手

徳づいて
利徳があつて。

吐田・檜原
何れも大和國。

後詰
後方に詰めて居る軍勢。

先をまはして散々に射る。寄手さしもの大勢なれども、僅の敵に驚き騒いで、或は維げる馬に乗つてあふれども進まず。或は弛せる弓に矢をはげて射んとすれども射られず。物具一領に二三人取りつき、我がよ、人のよと、引き合ひける其の間に、主討たるれども従者は知らず、親討たるれども子は助けず、蜘蛛の子を散らすが如く石川河原へ引き退く。其の道五十町が間、馬物具の捨てたる事足の踏所もなかりければ、東條一郡の者共は、俄に徳附いてぞ見えたりける。さしもの東國勢思ひの外に爲損じて初度の合戦に負けければ、楠が武略侮りにくしと思ひけん、吐田・檜原邊に各打ち寄せたれども、聽て又推し寄せんとは擬せず、こゝに暫く控へて、畿内の案内者を先に立て後詰のなきやうに山を刈り廻し、家を焼き拂うて、心やすく城を攻むべしなど評定ありけるを、本間澁谷の者共の中に、親討たれ子討たれたる者多かりければ、「命生きては何かせん、よしや我等が勢ばかり

なりとも馳せ向つて討死せん」と憤りける間諸人皆是に勵まされて
我も〜と馳せ向ひけり。

彼の赤坂の城と申すは東一方こそ山田の畔重々と高く少し難所のやうなれ、三方は皆平地に續きたるを堀一重に塀一重塗つたれば如何なる鬼神が籠りたりとも何程の事かあるべきと、寄手皆是を侮り、又寄するとひとしく堀の中切岸の下まで攻めついで、逆茂木を引きのけて討つて入らんとしけれども、城中には音もせず。是は如何様昨日の如く手負を多く射出だして漂ふ處へ、後詰の勢を出して揉み合はんずるよと心得て、寄手十萬餘騎を分けて後の方へ差向け、殘る二十萬騎稻麻竹葦の如く城を取り巻いてぞ攻めたりける。かゝりけれども城の中よりは矢の一筋をも射出さず、更に人ありとも見えざりければ、寄手いよ〜氣に乗つて、四方の塀に手をかけ、同時に上り越えんとしける處をもとより塀を二重に塗つて、外の塀をば切

稻麻竹葦

多くのものゝ入り亂れたるさまのたとへ。

つて落すやうに拵へたりければ、城の中より四方の塀の釣繩を一度に切つて落しける間、塀に取りつきたる寄手千餘人、壓しに打たれたるやうにて目ばかりはたらく處を、大木大石を投げ懸け〜打ちける間、寄手又今日の軍にも七百餘人討たれたり。

暗然として
引込思案で。
平城
平地に拵へた城。

攻具足
攻め道具。
いため皮
膠の水に革を浸して打ち固めて乾したるもの。

東國の勢ども兩日の合戦に手ごりをして、今は城を攻めんとする者一人もなし。唯其の近邊に陣々を取つて遠攻にこそしたりけれ。四五日が程はかやうにてありけるが、あまりに暗然として守り居たるも云甲斐なし。方四町にだに足らぬ平城に敵四五百人籠りたるを、東八箇國の勢どもが攻めかねて遠攻したることのあさましきよなど、後までも人に笑はれんことこそ口惜しけれ。前々は逸りのまゝ楯をも衝かず、攻具足をも支度せで攻むればこそ、そゞろに人は損じつれ。今度ははてだてを替へて攻むべしとて、面々に持楯をはがせ、其の面にいたため皮を當て、たやすく討たれぬやうに拵へてかづ

綿かみ
鐵の左右兩肩に
あたる所。胸板
なつりあぐるた
めに作る。

きつれてぞ攻めたりける。切岸の高さ堀の深さ幾程もなければ走りかゝつて堀に着かんことはいと易く覺えけれども、是も亦釣堀にやあらんと危みて、左右なく堀には着かず、皆堀の中におり漬つて熊手をかけて堀を引きける間、既に引き破られぬべう見えける處に城の中より柄の一二丈長き柄杓に、熱湯の沸き返りたるを酌んでかけたりける間、甲の天邊綿かみのはづれより、熱湯身に透つて焼け爛れければ、寄手こらへかねて、楯も熊手も打ち捨ててばつと引きける見苦しさ、矢庭に死ぬるまでこそなけれども、或は手足を焼かれて立ちもあがらず、或は五體を損じて病み臥する者、二三百人に及べり。寄手てだてを替へて進むれば、城中工を替へて防ぎける間、今は兎も角もすべきやうなくして、唯食攻にすべしとぞ議せられける。かゝりし後はひたすら軍をやめて、己が陣々に櫓をかき逆茂木を引いて遠攻にこそしたりけれ。是にこそなか／＼城中の兵慰む方もなく氣

も疲れぬる心地してける。

楠此の城を構へたる事暫時のことなりければ、はか／＼しく兵糧など用意もせざれば、合戦始まつて城を圍まれたる事僅か二十日あまりに、城中兵糧盡きて、今四五日のかてを殘せり。かゝりければ、正成諸卒に向つて云ひけるは、此の間數箇度の合戦に打ち勝つて、敵を亡ぼすこと數を知らずといへども、敵大勢なれば敢て物の數ともせず、城中既に食盡きて援けの兵なし。元來天下の士卒に先立つて草創の功を志とする上は、節に當り義に臨んでは命を惜むべきにあらず。然りといへども事に臨んで恐れ、謀を好んで成すは勇士のする所なり。されば暫く此の城を落ちて正成自害したる體を敵に知らせんと思ふなり。其の故は正成自害したりと見及ばず、東國勢定めて悦をなして下向すべし。下らば正成討つて出で、又上らば深山に引き入り、四五度が程東國勢を惱ましたらん、などか退屈せざらん。

事に臨んで
云々

子路曰、子行三
軍、則雖與、子
曰、暴虎馮河、死
而無悔者吾不
與也。必也、臨
事而懼、好謀而
成者也。(論語、
述而篇)

是身を全うして敵を亡ぼす計畧なり。面々如何計ひ給ふ。といひければ、諸人皆然るべし。とぞ同じける。

「さらば」とて城中に大なる穴を二丈ばかり掘つて、此の間堀の中に多く討たれて伏したる死人を二三十人穴の中に取り入れて、其の上に炭薪を積んで雨風の吹きそぐ夜をぞ待ちたりける。正成が運天命に叶ひけん、吹く風俄に砂を揚げて降る雨更に篠を衝くが如し。夜色窈冥として氈城皆帷幕を垂る。是ぞ待つ所の夜なりければ、城中に人を一人残し留めて、我等落ち延びんこと四五町にも成りぬらんと思はんずる時、城に火をかけよ。と云ひ置いて皆物具を脱ぎ寄手に紛れて五人三人別々になり、敵の役所の前、軍勢の枕の上を超えてしづくと落ちけり。正成長崎が廐の前を通りける時、敵是を見つけて、何物なれば御役所の前を案内も申さず忍びやかに通るぞ。と咎めければ、正成是は大將の御内の者にて候ふが、道を踏み違へて候ひ

窈冥 おく深く暗きこと。
氈城 と。
陣營。

臂のかゝり
臂の關節。

一心稱名
一心に佛菩薩の
名號を稱へること。

ける。といひ捨て、足早にぞ通りける。咎めつる者、さればこそ怪しきものなれ、如何様馬盗人と覺ゆるぞ。唯射殺せ。とて近々に走り寄つて、真直中をぞ射たりける。其の矢正成が臂のかゝりに答へて、したゝかに立ちぬとおぼえけるが、すはだなる身に少しも立たずして、箭を返して飛び翻る。後にその矢の痕を見れば、正成が年來信じて讀み奉る観音經を入れたりける。膚の守に矢中つて、一心稱名の二句の偈に矢先留りけるこそ不思議なれ。正成必死の鎌に死を遁れ、二十餘町落ち延びて後を顧みれば、約束に違はず早や城の役所どもに火をかけたなり。寄手の軍勢火に驚いて、すはや城は落ちけるぞ。とて勝鬨を作つて、あますな漏すな。と騒動す。焼け静まりて後城中をみれば、大なる穴の中に炭を積んで焼け死にたる死骸多し。皆是を見て、あな哀や、正成はや自害をしてけり。敵ながらも弓矢取つて尋常に死にたる者かな。と、譽めぬ人こそなかりけれ。

八 隱岐御遷幸

元弘二年三月七日、千葉介貞胤、佐々木佐渡判官入道道譽等五百餘騎にて路次を警固仕つて先帝を隱岐國へ遷し奉る。供奉の人とは、一條頭大夫行房、六條少將忠顯、御介錯は三位殿御局ばかりなり。其の外は皆甲冑をよろひて、弓箭を帶せる武士ども、前後左右に打ち圍み奉りて、七條を西へ、東洞院を下へ御車をきしれば、京中貴賤男女小路に立ち並びて、「正しき一天の主を下として奉ることのあさましさよ、武家の運命今に盡きなむ」と憚る所なくいふ聲巷に満ちて、只赤子の母を慕ふ如く泣き悲しみければ、聞くに哀を催して、警固の武士も諸共に皆鎧の袖をぞぬらしける。

櫻井の宿を過ぎさせ給ひける時、八幡を伏し拜み御輿を昇据ゑさせ、二度帝都還幸の事をぞ御祈念ありける。八幡大菩薩と申すは

先帝
後醍醐天皇。
介錯
世話役。

櫻井
攝津の國。
八幡
男山八幡宮。

應化
機に應じて本體
を更め假體を現
すこと。

印南野

攝津國。

源氏の大将

朧月夜

共に源氏物語に
出づる人物。

杉坂

美作國。

久米の佐羅山

美作國。
美作や、くめの
さら山さらさら
に我が名は立て
じ萬世までに。
(古今集)

應神天皇の應化百王鎮護の御誓あらたなれば、天子行在の外までも定めて擁護の御眸をぞ廻らさるらんと、たのもしくこそ思召しけれ。淡川を過させ給ふ時、福原の京を御覽ぜられて、平相國清盛が四海を掌に握つて平安城を此の卑濕の地に遷したりしかば、幾程もなくして亡びしも、偏に上を犯さんとせし驕の末果さずして、天のために罰せられしぞかしく、思召し慰む端となりけり。印南野を末に御覽じて須磨の浦を過させ給へば、昔源氏の大将の朧月夜に名を立て、此の浦に流され、三年の秋を送りしに波只こゝもとに立ちし心地して涙落つとも覺えぬに、枕は浮くばかりになりけりと、旅寢の秋を悲しみしも、理なりと思召さる。明石の浦の朝霧に遠くなり行く淡路瀉寄せ來る波も高砂の尾上の松に吹く嵐跡に幾重の山川を杉坂越えて美作や、久米の佐羅山さらさら、今はあるべき時ならぬに、雲間の山に雪見えて遙に遠き峯あり。御警固の武士を召して山の名

内證深心

諸佛心中の妙理を深く心に信ずること。

或時は雞唱に

云々

晨起動征鐸、客行悲故鄉、雞聲茅店月、人迹板橋霜、(風庭筠、商山早行)。

を御尋ねあるに、「是は伯耆の大山と申す山にて候。」と申しければ暫く御輿を止められ、内證深心の法施を奉らせ給ふ。或時は雞唱に茅店の月を抹過し、或時は馬蹄に板橋の霜を踏破して行路に日を窮めければ、都を御出あつて十三日と申すに出雲の見尾の湊に著かせ給ふ。爰にて御船を躡して渡海の順風をぞ待ち給ひける。

九 兒 島 高 徳

志士仁人云々
志士仁人無二求生以害仁、有

其の頃備前國に兒島備後三郎高德といふ者あり。主上笠置に御座ありし時、御方に参じて義兵を擧げしが、事未だ成らざる先に笠置も落され楠も自害したりと聞えしかば、力を失うて黙しけるが、主上隱岐國へ遷されさせ給ふと聞きて貳心なき一族共を集めて評定しけるは、「志士仁人は生を求めて以て仁を害すること無く、身を殺して以て仁を爲すことありといへり。義を見てせざるは勇無きなり。」

殺身以爲仁。(論語、衛靈公篇) 義を見て見義不爲、無勇也。(論語、爲政篇)

いざや臨幸の路次に参り會ひ、君を奪ひ取り奉りて大軍を起したとひ屍を戰場に曝すとも名を子孫に傳へん」と申しければ、心ある一族ども皆此の議に同ず。「さらば路次の難所に相待ちて、其の隙を伺ふべし」とて、備前と播磨との境なる船坂山の嶺に隠れ伏し、今やくとぞ待ちたりける。

臨幸あまりに遅かりければ、人を走らせて是を見するに、警固の武士、山陽道を経ず播磨の今宿より山陰道にかゝり遷幸を成し奉りける間、高德が支度相違してけり。「さらば美作の杉坂こそ究竟の深山なれ、こゝにて待ち奉らん」とて、三石の山よりすぢかひに道もなき山の雲を凌ぎて杉坂へ着きたりければ、主上はや院庄へ入らせ給ひぬ」と申しける間、力なくこれより散々になりけるが、せめても此の所存を上聞に達せばやと思ひける間、微服潜行して、時分を窺ひけれども、然るべき隙もなかりければ、君の御座ある御宿の庭に大なる櫻木あ

三石の山
備前國。
院庄
美作國。

勾踐

支那越國の王。

范蠡

越王勾踐の忠臣。

天莫空勾踐。時非無范蠡。

御警固の武士ども、朝に是を見つけて、何事を如何なる者が書きたるやらんとて、讀みかねて、則ち上聞に達してけり。主上はやがて詩の心を御さとりありて、龍顔殊に御快く笑ませ給へども、武士共は敢て其の來歴を知らず、思ひ咎むることもなかりけり。

さる程に先帝は、出雲の三尾の湊に十餘日御逗留あつて、順風になりければ、船人纜を解いて御儀して、兵船三百餘艘、前後左右に漕ぎ並べて、萬里の雲にさかのぼる。時に滄海沈々として、日西北の波に没し、雲山迢々として、月東南の天に出づれば、漁船のかへる程見えて、一燈柳岸に幽なり。暮るれば、蘆岸の煙に船を繋ぎ、明くれば、松江の風に帆を揚げ、浪路に日敷を重ぬれば、都を御出あつて、後二十六日と申すに、御船隱岐の國に着きにけり。

迢々

はるかなるさま。

玉宸咫尺

玉座に接近する。

天子のお側に近づく。

雞人曉を云々

雞人曉唱聲驚。

明王之眠。朗詠。

雞人は時刻を奏する人。

夜のおとと。

天子の御殿。

萩の戸。

清涼殿の北部に位する室。

佐々木隱岐判官貞清、國府の島といふ所に、黒木の御所を作りて、皇居とす。玉宸咫尺して、召使はれける人としては、六條の少將忠顯、頭の大奉行房、女房には三位殿の御局ばかりなり。昔の玉樓金殿に引き替へて、憂き節、茂き竹、椽、涙、隙なき松の牆、一夜を隔つる程も堪へ忍ぶべき御心地ならず。雞人曉を唱ふる聲、警固の武士のとのゐを催す聲ばかり御枕の上に近ければ、夜のおととに入らせ給ひても、露まどろませ給はず。萩の戸の明くるを待ちし、朝政なけれども、誠に曉ごとの御勤、北辰の御拜も怠らず。今年如何なる年なれば、百官罪なくして、愁の涙を配所の月に滴て、一人位を易へ、宸襟を他郷の風に惱まし給ふらん。天地開闢よりこの方かゝる不思議を聞かず。されば天にかゝる日月も誰が爲に明なることを恥ぢざらん。心なき草木も悲しみ、花開くことを忘れつべし。

一〇 大塔宮熊野落

大塔宮二品親王

後醍醐天皇の皇子護良親王。

南都

奈良。

虎の尾を履む

易經に出づ、又書經君牙篇に、

一心之憂危、若

蹈虎尾、涉中于

渚水、とあり。

一乘院

興福寺の内にあ

り。

候人

門跡家に召使は

る人。

大塔宮二品親王は、笠置の城の安否を聞召されんために、暫く南都の般若寺に忍んで御座ありけるが、笠置の城已に落ちて主上捕はれさせ給ひぬと聞えしかば、虎の尾を履むおそれ御身の上に迫りて、天地廣しと雖も御身をかくさるべき所なし。日月明かなりと雖も長夜に迷へる心地して、晝は野原の草に隠れて、露に臥す鶉の床に御涙を争ひ、夜は孤村の辻に佇みて人を咎むる里の犬に御心を惱まされ、何處とても御心安かるべき所なかりければ、かくても暫しはと思召されける處に、一乘院の候人うらひ按察あきま法眼好專、如何して聞きたりけん、五百餘騎を率して未明に般若寺へぞ寄せたりける。折節宮に付き奉りたる人、一人もなかりければ、一防ふせぎて落ちさせ給ふべきやうもなかりける上、透間もなく兵既に寺内に打ち入

大般若

唐の支那三藏の

書經、六百卷。

隱形の咒

摩利支天經に見

えたる禁咒の

文。

りたれば紛れて御出あるべき方もなし。さらばよし自害せんと思召して既に推膚脱がせ給ひたりけるが、事叶はざらん期に臨んで腹を切らんことはいと安かるべし。若しやと隠れて見ばやと思召し返して佛殿の方を御覽するに、人の讀みかけて置きたる大般若の唐櫃三つあり。二つの櫃は未だ蓋を開けず、一つの櫃は御經を半過ぎ取出して蓋をもせざりけり。此の蓋を開けたる櫃の中へ御身を縮めて伏させ給ひ、其の上に御經を引きかづきてくもり隱形の咒を御心の中に唱へてぞおはしける。若し搜し出さるればやがて突立てんと思召して、氷の如くなる刀を抜いて御腹にさし當て、兵こゝにこそといはんずる一言を待たせ給ひける御心の中、推量るも猶淺かるべし。さる程に兵佛殿に亂入つて、佛壇の下天井の上迄も残る所なく搜しけるが、餘りに求めかねて、是體の物こそ怪しけれ。あの大般若の櫃を開けて見よとて、蓋したる櫃二つを開いて、御經を取り出し底を

玄奘三藏 唐の大慈恩寺の僧。印度に渡り梵本六百五十七部を持歸りて朝に獻す。譯する所の經論、七十五部一千三百三十五卷あり。

摩利支天 有、天名、摩利支。有、大神、通自在之法、無、人能知之、無、人能害之、無、人能縛之、云々。

(摩利支天經)

翻して見けれどもおはせず、「蓋開きたる櫃は見、るまでもなし」とて、兵皆寺中を出去りぬ。宮は不思議の御命を續がせ給ひ夢に道行く心地して猶櫃の中におはしけるが、若し又兵立ちかへり委しく搜す事もやあらんずらんと御思案あつて、やがて前に兵の搜し見たりつる櫃に、入替らせ給ひてぞおはしける。案の如く兵共又佛殿に立ちかへり、「前に蓋の開きたるを見ざりつるが覺束なし」とて、御經を皆打移して見けるが、から／＼と打笑うて、「大般若の櫃の中をよく／＼搜したれば、大塔宮はいらせ給はで大唐の玄奘三藏こそおはしけれ」と戯れければ、兵皆一同に笑うて門外へぞ出でにける。是偏に摩利支天の冥應、又は十六善神の擁護に依る命なりと、信心肝に銘じ感涙御袖を潤せり。

かくては南都邊の御隱家も叶ひ難ければ、則ち般若寺を御出ありて熊野の方へぞ落ちさせ給ひける。御供には光林房玄尊、赤松律師

古來武士の守護神とす。

十六善神 大般若經の守護神。

龍樓鳳闕 皇宮。

華軒香車 共に貴人の乗用する立派な車。

濱ゆふ 海濱に生じ、空の上部に、おもとに似たる葉、數枚を出す。

玉津島 和歌の浦にあり、玉津島明神は衣通姫を祭る。

則祐、村上彦四郎等九人なり。宮を始め奉りて御供の者までも皆柿の衣に笈を掛け、頭巾眉半に責め其中に年長ざるを先達に作り立て、田舎山伏の熊野參詣する體にぞ見せたりける。此の君元より龍樓鳳闕の内に人とならせ給ひて、華軒香車の外を出でさせ給はぬ御事なれば、御歩行の長途は定めて叶はせ給はじと、御供の人々かねては心苦しく思ひけるに、案に相違して、いつ習はせ給ひたる御事ならねども怪しげなる踏皮、脚巾、草鞋を召して少しも草臥れたる御氣色もなく、社々の奉幣、宿々の御勤、懈らせ給はざりければ、路次に行き逢ひける道者も、勤修を積める先達も、見咎むることなかりけり。

由良の湊を見渡せば、沖漕ぐ船の梶緒たえ、浦の濱ゆふ幾重とも知らぬ浪路に鳴く千鳥、紀伊路の遠山、渺々と藤代の松にかゝれる磯の浪、和歌吹山を外に見て、月に整ける玉津島、光も今はさらでだに、長汀曲浦の旅の路、心を碎く習なるに、雨を含める孤村の樹、夕を送る遠寺

切目の王子

紀伊國、五體王子社のある所。

三所權現

紀伊國、熊野の本宮・新宮・那智の三權現。

分段同居の間

衆生の住する娑婆世界の間。

兩所權現

熊野の本宮・新宮をいふ。

應作

應化。機に應じての作業。

玄鑒

神佛の照覽。

の鐘、哀を催す時しもあれ切目の王子に著き給ふ。

其の夜は叢祠の露に御袖を片敷きて、夜もすがら祈り申させ給ひけるは、南無歸命頂禮三所權現滿山護法十萬の眷屬八萬の金剛童子、垂跡和光の月明かに分段同居の間を照らし、逆臣忽に亡びて朝廷再び輝く事を得しめ給へ。傳へ承る、兩所權現は是伊弉諾伊弉册の應作なり。我君苗裔として、今朝日忽に浮雲の爲に隠されて冥闇たり。豈傷まざらんや。玄鑒空しきに似たり。神若し神たらば、君蓋んぞ君たらざる。と五體を地に投げて、一心に誠を致してぞ祈り申させ給ひける。丹誠無二の御勤感應などかあらざらんと、神慮も暗に計られたり。

夜もすがらの禮拜に御窮屈ありければ、御肱を曲げて枕として暫く御まどろみありける御夢に鬢面結ひたる童子一人來つて、熊野三山の間は尙も人の心不和にして大義成り難し。是より十津河の方

へ御渡り候うて時の至らんを御待ち候へかし。兩所權現より案内者に附けまひらせられて候へば、御道しるべ仕るべく候」と申すと御覽ぜられ、御夢は即ち覺めにけり。是權現の御告なりけりと、たのもしく思召されければ、未明に御悅の奉幣を捧げ、やがて十津河を尋ねてぞ分入らせ給ひける。其の道の程三十餘里が間には絶えて人里もなかりければ、或は高峰の雲に枕を欹て苔の庭に袖を敷き、或は岩漏る水に渴を忍びて、朽ちたる橋に肝を消す。山路もとより雨無うして空翠常に衣を濕す。見上ぐれば萬仞の青壁劍に削り、見下せば千丈の碧潭藍に染めり。數日の間かゝる嶮難を経させ給へば、御身は草臥果て、流るゝ汗水の如し。御足は飲け損じて草鞋血に染れり。御供の人々も、其身鐵石にあらざれば、みな飢ゑつかれては、かばかしくも歩み得ざりけれども、御腰を押し御手を引いて、路の程十三日に十津河へぞ着かせ給ひける。

青壁・碧潭
山復山、何工削、成青巖之形。水復水、誰家染、出碧潭之色。(朗詠集)

二 天王寺の戦

去年、
元弘元年。

楠兵衛正成は、去年赤坂城にて自害して焼け死にたる眞似をして落ちたりしを、實と心得て、武家より其の跡に湯淺孫六入道定佛を地頭に据ゑ置きたりければ、今は河内の國に於ては殊なる事あらじと心安く思ひける處に、元弘二年四月三日楠五百餘騎を率して俄に湯淺が城へ押し寄せて、息をも繼がず攻め戦ふ。城中に兵糧の用意乏しかりけるにや、湯淺が所領紀伊國の阿瀬川より人夫五六百人に兵糧を持たせて、夜中に城へ入らんとする由、楠ほのかに聞いて、兵を道の切所へ差し遣し、悉く是を奪ひ取つて其の依に物具を入れ替へて、馬に負はせ人夫に持たせて、二三百人兵士のやうに出立たせて城中へ入らんとす。楠が勢是を追ひ散らさんとする眞似をして、追つ返しつ同士軍をぞしたりける。湯淺入道是を見て、我兵糧入るゝ兵共

切所
要害の所。

住吉・天王寺
攝津國、大阪の
南都。
しきなみを打
つ
頻りに次から次
へと馳せ来る。

が、楠が勢と戦ふぞと心得て、城中より打つて出で、そゞろなる敵の兵どもを城中へぞ引入れける。楠が勢ども思のまゝに城中に入りすまして、俵の中より物具ども取り出し、ひし／＼と堅めて則ち鬨の聲をぞ揚げたりける。城の外の勢、同時に木戸を破り、塀を越えて攻め入りける間、湯淺入道内外の敵に取り籠められて、戦ふべきやうもなかりければ、忽に首を伸べて降人に出づ。楠其の勢を合せて七百餘騎にて、和泉・河内の兩國を靡けて大勢になりければ、五月十七日に先づ住吉・天王寺邊へ打つて出で、渡部の橋より南に陣をとる。

然る間、和泉・河内の早馬しきなみを打つて、楠己に京都へ攻め上るよし告げければ、洛中の騒動なゝめならず。武士東西に馳散りて貴賤上下周章つる事窮りなし。かゝりければ、兩六波羅には畿内近國の勢雲霞の如く馳せ集りて、楠今や攻め上ると待ちけれども、敢て其の儀もなければ、聞くにも似ず楠小勢にてぞあるらん、此方より押し

尼崎・神崎・柱松
何れも攝津國。

寄せて打ち散らせ」とて、隅田高橋を兩六波羅の軍奉行として、四十八箇所の篝并に在京人、畿内近國の勢を合せて、天王寺へさし向けらる。其の勢都合五千餘騎、同二十日京都を立つて、尼崎・神崎・柱松の邊に陣を取つて、遠篝を焼いて其の夜を遅しと待ち明かす。

楠是を聞いて、二千餘騎を三手に分け、宗徒の勢をば住吉・天王寺に隠して、僅に三百騎ばかりを渡部の橋の南に控へさせ、大篝二三箇所に焼かせて相向へり。是はわざと敵に橋を渡させて、水の深みに追ひはめ、雌雄を一時に決せんがためなり。

さる程に明くれば五月二十一日に、六波羅の勢五千餘騎、所々の陣を一に合せ、渡部の橋まで打莅んで河向にひかへたる敵の勢を見渡せば、僅に二三百騎に過ぎず、剩へ瘦せたる馬に繩手綱かけたる體の武者どもなり。隅田高橋是を見て、さればこそ和泉・河内の勢の分際、さこそあらめと思ふに合せて、はかしくしき敵は一人もなかりけり。

西門
天王寺の西門。
鶴翼
鶴の羽をひろげ
たやうに左右に
勢を張る陣形。

「此の奴原を一々に召し捕つて、六條河原に切りかけて、六波羅の御感に預らん」といふまゝに、隅田高橋人交ぜもせず、橋より下を一文字にぞわたしける。五千餘騎の兵共是を見て、我先にと馬を進めて、或は橋の上を歩ませ或は河瀬を渡して向の岸にかけあがる。楠が勢是を見て、遠矢少々射捨てて、一戦もせず天王寺の方へ引退く。六波羅の勢これを見て、勝に乗り、人馬の息をもつがせず、天王寺の此の在家まで揉みに揉うでぞ追ひたてたりける。楠思ふ程に敵の人馬を疲らして、二千騎を三手に分けて、一手は天王寺の東より敵を弓手にうけてかけ出づ。一手は西門の石の鳥居より魚鱗懸にかけ出づ。一手は住吉の松の蔭よりかけ出でて、鶴翼に立て、開き合す。六波羅の勢を見合すれば、對揚すべきまでもなき大勢なりけれども、陣の張様しどろにて、却つて小勢に困まれぬべくぞ見えたりける。隅田高橋これを見て、敵後に大勢を隠してたばかりけるぞ、この邊は馬の足

立悪しうして叶はじ。廣みへ敵をおびき出し、勢の分際を見計らうて、懸合せく勝負を決せよ。」と下知しければ、五千餘騎の兵共敵に後を切られぬ先にと、渡部の橋を指して引き退く。楠が勢これに利を得て、三方より勝鬨を作りて追ひかくる。橋近くなりければ、隅田高橋是を見て、敵は大勢にてはなかりけるぞ、こゝにて返し合せずんば大河後にあつて悪しかりぬべし。返せや兵ども。」と、馬の足を立て直しく、下知しけれども、大勢の引き立ちたる事なれば、一返しもかへさず、唯我先にと橋の危きをもいはず馳せ集りける間、人馬共に推し落されて水に溺るゝ者數を知らず。或は淵瀬をも知らず渡し懸りて死ぬる者もあり、或は岸より馬を馳せ倒して其の儘討たるゝ者もあり。唯馬物具を脱ぎ捨てて逃げ延びんとする者はあれども、返し合はせて戦はんとする者はなかりけり。然れば五千餘騎の兵共、殘少なに打ちなされて這々京へぞ上りける。其の翌日に何者かし

たりけん、六條河原に高札を立て、一首の歌をぞ書きたりける。

渡部の水いかばかり早ければ

高橋落ちて隅田流るらん

京童の癖なれば、此の落書を歌に作つてうたひ、或は語り傳へて笑ひける間、隅田高橋面目を失ひ、暫くは出仕を退め、虚病してぞ居たりける。

一二 天王寺未來記

元弘二年八月三日、楠兵衛正成住吉に參詣し、神馬三匹を獻ず。翌日天王寺に詣でて白鞍置いたる馬、白覆輪の太刀、鎧一領副へて引き進らす。是は大般若經轉讀の御布施なり。啓白事終つて、宿老の寺僧卷數を捧げて來れり。楠則ち對面して申しけるは、「正成不肖の身として、此の一大事を思ひ立ちて候事涯分を計らざるに似たりと雖

白覆輪の太刀
銀で柄の縁に覆
輪をつけた太
刀。

も勅命の輕からざる禮儀を存ずるに依つて、身命の危きを忘れたり。然るに兩度の合戦聊か勝に乗つて、諸國の兵招かざるに馳せ加はれり。是天の時を與へ佛神擁護の眸を回らさるゝかと覺え候。誠やらん傳へ承れば、上宮太子の當初、百王治天の安危を勘へて、日本一州の未來記を書き置かせ給ひて候ふなる、拜見若し苦しからず候はゞ今の時に當り候はん卷ばかり、一見仕り候はゞや、といひければ、宿老の寺僧答へて云はく、太子守屋の逆臣を討つて、始めて此の寺を建てて佛法を弘められ候ひし後、神代より始めて持統天皇の御宇に至る迄を記されたる書三十卷をば前代舊事本紀とて、卜部宿禰是を相傳して有職の家を立て候。其の外に又一卷の秘書を留められて候。是は持統天皇以來、末世代々の王業、天下の治亂を記されて候。是をばたやすく人の披見する事は候はね共、別儀を以て密かに見參に入候ふべし。とて、銀鑰を開いて、金軸の書一卷を取り出せり。正成悦

上宮太子
聖德太子、用明天皇の第一皇子。

持統天皇
第四十一代。

びて則ち是を披覽するに、不思議の記文一段あり。其の文に云はく、當人王九十六代。天下一亂而主不安。此時東魚來吞四海。日没西天三百七十餘箇日。西鳥來食東魚。其後海內歸一三年。如獼猴者掠天下三十餘年。大兇變歸一元。云々。
 正成不思議に覺えて、よくよく思案して此の文を考ふるに、主上既に入皇の始より九十六代に當り給へり。天下一度亂れて主安からずとあるは、是此の時なるべし。東魚來つて四海を吞むとは逆臣相摸入道の一類なるべし。西鳥東魚を食ふとあるは關東を滅ぼす人あるべし。日西天に没すとは主上隱岐へ遷されさせ給ふことなるべし。三百七十餘箇日とは明年の春の頃君隱岐國より還幸成つて再び帝位に即かせ給ふべき事なるべしと、文の心を明に勘ふるに、天下の反覆久しからじとたのもしく覺えければ、金作の太刀一振此の老僧に與へて、此の書をばもとの秘府に納めさせけり。後に思ひ合

識文

未來のことを書きしもの。未來記、豫言書。

するに、正成が勘へたる所更に一事も違はざりけるは、不思議なりし識文なり。

一三 吉野の城軍

元弘三年正月十六日、二階堂出羽入道道蘊、六萬餘騎の勢にて大塔宮の籠らせ給へる吉野の城へ押し寄せす。菜摘川の川淀より城の方を見上げたれば、嶺には白旗、赤旗、錦の旗、深山風に吹きなびかされて雲か花かと怪まる。麓には數千の官車、兜の星を耀かし、鎧の袖を連ねて錦繡しける地の如し。峯高くして道ほそく、山嶮しうして苔滑なり。されば幾十萬騎の勢にて攻むるとも、たやすく落すべしとは見えざりけり。

同十八日卯の刻より、兩軍互に矢合して入替へく、攻め戦ふ。官

菜摘川

吉野菜摘村。

軍は物馴れたる案内者どもなれば、此處のつまり彼處の難所に走り散つて攻め合せ開き合せ散々に射る。寄手は死生不知の坂東武士なれば、親子討たるれども顧みず、主従滅ぶれども、物のかずともせず乗越えく、攻め近づく。夜晝七日が間、息をもつかず相戦ふに、城中の勢三百餘人討たれければ、寄手も八百餘人討たれにけり。況や矢に當り石に打たれ、生死の際を知らざる者は幾千萬といふ數を知らず。血は草芥を染め、屍は路徑に横はれり。されども城の體少しもよわらねば、寄手の兵多く退屈してぞ見えたりける。

爰に此の山の案内者として、一方へ向けられたりける吉野の執行岩菊丸、己が手の者を呼び寄せて申しけるは、東條の大將金澤右馬助殿は、既に赤坂の城を攻落して金剛山へ向はれたりと聞ゆ。當山の事我等案内者たるに依つて、一方を承つて向ひたるかひもなく、攻め落さで數日を送ることこそ遺恨なれ。つらく、事の様を案ずるに此

執行

寺務を總理する僧職。

愛染寶塔
愛染明王を安置
せる塔

の城を大手より攻めば、人のみ討たれて落すことありがたし。推量するに、城の後の山金峰山には、峻を憑んで敵さまで勢を置きたる事あらじと覺ゆるぞ。物馴れたらんずる足輕の兵百五十人すぐつて歩立になし、夜に紛れて金峰山より忍び入り、愛染寶塔の上にて夜のほのくくと明けはてん時、鬨の聲を揚げよ。城の兵鬨の聲に驚いて度を失はん時、大手搦手三方より攻め上つて城を追落し、宮を生捕り奉るべし。とぞ下知しける。さらばとて案内知りたる兵百五十人をすぐつて、其の日の暮程より金峰山へ廻して、岩をつたひ谷を上るに、案の如く、山の峻しきを憑みけるにや、たゞこゝかしこの梢に旗ばかりを結び付け置きて、防ぐべき兵一人もなし。百餘人の兵ども、思ひのまゝに忍び入つて、木の下、岩の蔭に、弓箭を伏せ、冑を枕にして夜の明くるをぞ待ちたりける。

合圖の頃にもなりにければ、大手五萬餘騎、三方より押寄せて攻め

上る。吉野の大衆五百餘人、攻口におり合つて防ぎ戦ふ。寄手も城の内も互に命を惜まず追せ追下し、火を散してぞ戦ひたる。かゝる處に金峰山より廻りたる、搦手の兵百五十人、愛染寶塔よりおり下つて、在々所々に火をかけて、鬨の聲をぞ揚げたりける。

吉野の大衆前後の敵を防ぎかねて、或は自ら腹を掻き切つて猛火の中へ走り入つて死ぬるもあり、或は向ふ敵に引組んで、刺し違へて共に死ぬるもあり。思ひくくに討死をしける程に、大手の堀一重は死人に埋りて平地となる。

さる程に、搦手の兵、思ひも寄らず勝手の明神の前より押寄せて、宮の御座ありける藏王堂へ打つて懸かりける間、大塔宮今は遁れぬ處なりと思召し切つて、赤地の錦の鎧直垂に、緋絨の鎧のまだ巳の刻なるを透間もなくめされ、龍頭の兜の緒をしめ、三尺五寸の小長刀を脇に挟み、劣らぬ兵二十餘人前後左右に立ち、敵の群つて控へたる中へ

勝手の明神
吉野八幡の内。

巳の刻
今の午前十時、
正午より前なる
を以て、すべて
品物の新しきに
いふ。

走りかゝり、東西を拂ひ南北へ追ひ廻し、黒煙を立て切つて廻らせ給ふに、寄手大勢なりと雖も、纒かの小勢に切り立てられ、木の葉の風に散るが如く四方の谷へ颯と引く。

敵引けば、宮は藏王堂の大庭に竝み居させ給ひて、大幕打揚げて最後の御酒宴あり。宮の御鎧に立つ所の矢七筋御頼先二の御腕二箇所つかれさせ給ひて、血の流るゝ事瀧の如し。然れども立ちたる矢をも抜き給はず、流るゝ血をも拭ひ給はず、敷皮の上に立ちながら、大盃を三度傾けさせ給へば、木寺相摸四尺三寸の太刀の鋒に敵の首をさし貫いて、宮の御前に畏まり、戈鋌劍戟を降らす事電光の如くなり。磐石岩を飛ばす事春の雨に相同じ。然りとは云へども、天帝の身には近づかで、修羅かれが爲に破らるゝ。とはやしを揚げて舞ひたる有様は、漢楚の鴻門に會せし時、楚の項伯と項莊とが、劍を抜いて舞ひしに、樊噲庭に立ちながら、帷幕をかゝげて項王を睨みし勢も、かくやと覺

二の腕
肩と臂との間。

戈鋌

何れもほこ。
鋌は手矛。

天帝

帝釋天。
修羅と戦をしたること涅槃經に見ゆ。

鴻門の會

史記項羽本紀に詳し。

漢の高祖と楚の項羽との會見。

ゆるばかりなり。

大手の合戦急なりと覺えて、敵味方の鬨の聲相交はりて聞えけるが、實にも其の戦に自ら相當る事多かりけりと見えて、村上彦四郎義光鎧に立つ所の矢十六筋、枯野に残る冬草の風に伏したる如くに折り懸けて、宮の御前に參つて申しけるは、大手の一の木戸、云甲斐なく攻め破られつる間、二の木戸に支へて數刻相戦ひ候ひつる處に、御所中の酒宴の聲、すさまじく聞え候ひつるに就いて參つて候。敵既にかさに取上げて、御方の氣の疲れ候ひぬれば、此の城にて功を立てん事、今は叶はじと覺え候。未だ敵の勢の餘所へ廻し候はぬ前に、一方より打破つて、一先づ落ちて御覽あるべしと存じ候。但し跡に残り留つて戦ふ兵なくば、御所の落ちさせ給ふものなりと心得て、敵何處までもつゞきて追懸け進らせんと覺え候へば、恐ある事にて候へども、召されて候錦の御直垂と、御物具とを下し給ひて、御諱の字を冒し

かさに取上げて
勢に乗じて。

御所
こゝでは大塔
宮。

紀信高祖の眞似して
通鑑綱目に詳し。

て敵を欺き、御命に代りまゐらせ候はん。」と申しければ、宮「いかでかさることあるべき、死なば一所にてこそ兎も角もならめ。」と仰せられけるを、義光詞を荒らかにして、「斯かる淺ましき御事や候。漢の高祖、滎陽に圍まれし時、紀信高祖の眞似をして楚を欺かんと乞ひしをば、高祖これを許し給ひ候はずや。これ程に云甲斐なき御所存にて天下の大事を思召し立ちける事こそうたてけれ。はや其の御物具を脱がせ給ひ候へ。」と申して、御鎧の上帯を解き奉れば、宮げにもと思召しけん、御物具鎧直垂まで脱ぎ替へさせ給ひて、「我若し生きたらば汝が後生を弔ふべし。共に敵の手にかゝらば、冥途までも同じ岐に伴ふべし。」とおほせられて、御涙を流させたまひながら、勝手の明神の御前を南へ向つて落ちさせたまへば、義光は二の木戸の高櫓にのぼり、遙かに見送り奉りて、宮の御後影の幽に隔たせたまひぬるを見て、今はかうとおもひければ、櫓のさまの板を切り落し、身をあらはにして、

練貫
生絲を纏(たて)とし練絲を緯(よこ)として織つた細布。
二小袖
ふたへの小袖。
そば腹
脇腹。

天の河
十津河の上流。

大音聲を揚げて名のりけるは、天照大神の御子孫神武天皇より九十六代の帝、後醍醐天皇第二の皇子、一品兵部卿親王護良、逆臣のため、に亡ぼされ、恨を泉下に報ぜんために、只今自害する有様見置きて、汝等が武運忽ちに盡きて、腹を切らんずる時の手本にせよ。」と云ふまゝに、鎧を脱いで櫓より下へ投げ落し、錦の鎧直垂の袴ばかりに、練貫の二小袖を押膚脱いで、白く清げなる膚に刀をつき立て、左の脇より右のそば腹まで一文字に掻き切つて、腸つかんで櫓の板になげつけ、太刀を口に銜へてうつぶしに成つてぞ伏したりける。

大手搦手の寄手、これを見て、すはや大塔宮の御自害あるは。我先に御首を賜はらん。」とて、四方の圍を解いて一所に集まる。其の間に宮は引違へて、天の河へぞ落ちさせ給ひける。南より廻りける吉野の執行が勢五百餘騎、多年の案内者なれば、道をよこぎりかさにまはりて、打留め奉らんとぞ取籠むる。

庭訓
親より子に訓へ
る言。家庭の教訓。

平頸
馬の首の側面。

村上彦四郎義光が子息、兵衛藏人義隆は、父が自害しつる時、共に腹を切らんと、二の木戸の櫓の下まで馳せ來りたりけるを、父大きに諫めて、父子の義はさることなれども、しばらく生きて宮の御先途を見はて進らせよ。」と庭訓を殘しければ、力なく暫くの命を延べて、宮の御供にぞ候ひける。落ち行く道の軍事既に急にして、討死せずば、宮落ちさせ給はじと覺えければ、義隆唯一人踏み留まつて、追つてかゝる敵の馬の諸膝難いでは切りすゑ、平頸切つてははね落させ、九折なる細道に、五百餘騎の敵を相受けて、半時ばかりぞ支へたる。義隆、節石の如くなりと云へども、其の身金鐵ならざれば、敵の取巻きて射ける矢に、義隆既に十餘箇所の創を被りてけり。死ぬるまでもなほ敵の手にかゝらじと思ひけん、小竹の一叢ありける中へ走り入つて、腹掻き切つて死にけり。

村上父子が敵を防ぎ、討死しける其の間に、宮は虎口に死を御遁れ有つて、高野山へぞ落ちさせ給ひける。

一四 千劔破城の戰

千劔破城の寄手は、前の勢八十萬騎に、又赤坂の勢吉野の勢馳せ加はつて、百萬騎に餘りければ、城の四方二三里が間は、見物相撲の場の如く打圍んで、尺寸をも餘さず充ち満ちたり。旌旗の風に翻つて靡く氣色は、秋の野の尾花が末よりも繁く、劔戟の日に映じて耀きける有様は、曉の霜の枯草に布けるが如くなり。大軍の近づく處には、山勢是が爲に動き、関の聲の震ふ中には、坤軸須臾に摧けたり。此の勢にも恐れずして、纔に千人に足らぬ小勢にて、誰を憑み何をか待つと

千劔破城
又千早とも書
く。河内國金剛
山の西腹。

もなきに、城中にこらへて防ぎ戦ひける楠が心の程こそ不敵なれ。この城東西は谷深く切れて人の上るべきやうもなし。南北は金剛山につゞきてしかも峰峙ちたり。されども高さ二町ばかりにて、廻り一里に足らぬ小城なれば、何程のことかあるべきと、寄手是を見侮つて、初一兩日の程は向陣をも取らず、攻支度をも用意せず、我先にと城の木戸口の邊まで、かづきつれてぞ上りたりける。

城中の者共少しもさわがず、靜まりかへつて、高櫓の上より大石を投懸け、楯の板を微塵に打碎いて、漂ふ處を差しつめ、射ける間、四方の坂よりころび落ち、落ち重つて手を負ひ、死をいたす者、一日が中に五六千人に及べり。長崎四郎左衛門尉軍奉行にてありければ、手負死人の實檢をしけるに、執筆十二人、夜晝三日が間筆をも置かず註せり。さてこそ今より後は、大將の御許なくして合戦したらんずる輩をば、却て罪科に行はるべしと觸れられければ、軍勢暫く軍を

止めて、先づ己が陣をぞ構へける。こゝに赤坂の大將金澤右馬助、大佛奥州にむかつて宣ひけるは、前日赤坂の城を攻め落しつること全く士卒の高名にあらず。城中の構を推し出して水を留めて候ひしに依つて敵程なく降参仕り候ひき。是を以て此の城を見候ふに、是程纒なる山の嶺に用水あるべしとも覺え候はず。又あげ水などをよその山より懸くべき便も候はぬに、城中に水たくさんに有りげに見ゆるは如何様東の山の麓に流れたる溪水を夜々に汲むかと覺えて候。あはれ宗徒の人々一兩人に仰せ附けられて、この水を汲ませぬやうに御計らひ候へかし」と申されければ、兩大將「此の儀然るべしと覺え候」とて、名越前守を大將として、その勢三千餘騎を指分けて水の邊に陣を取らせ、城より下りぬべき道々に、逆茂木を引きてぞ待ちかけゝる。

楠は元來勇氣智謀相兼ねたる者なりければ、此の城を拵へける始

兩大將
大佛高直。
長崎高資。

形の如く
一通り。

用水の便をみるに、五所の祕水とて、峯通る山伏の祕して汲む水この峰に有つて、滴ること一夜に五斛許なり、この水いかなる早にもひる事なければ、形の如く人の口中を濡さん事相違あるまじけれども、合戦の最中は、或は火矢を消さん爲、又喉の乾くこと繁ければ、此の水許りにては不足なるべしとて、大きな木を以て水船を二三百打たせて水を湛へ置きたり。又數百箇所作り雙べたる役所の軒に繼樋を懸けて、雨ふれば霽を少しも餘さず舟にうけ入れ、舟の底に赤土を沈めて、水の性を損ぜぬ様にぞ拵へける。この水を以て、たとひ五六十日雨降らずとも、こらへつべし。其中又なかは雨降ること無からんと料簡したる智慮の程こそ淺からね。されば城よりは強ちに此の谷水を汲まんともせざりけるを、水ふせぎける兵共夜毎に機をつめて今や〜と待ち懸けゝるが、始の程こそ有れ、後には次第々々に心懈り機緩みて、「此の水をば汲まざりけるぞ」とて、用心の體少し

無沙汰にぞなりにける。楠是を見すましまして、究竟の射手を揃へて、二三百人夜に紛れて城よりおろし、まだ東雲の明けはてぬ霞隠れより押寄せ、水邊につめて居たる者共二十餘人切り伏せて、透間もなく切つて懸りける間、名越前守こらへ兼ねて、本の陣へぞ引かれける。寄手數萬の軍勢これを見て、渡り合はせんとひしめけども、谷を隔て尾を隔てたる道なれば、たやすく驅けあはする兵もなし。兎角しける其の間に、捨て置きたる旗、大幕など取り持たせて、楠が勢閑かに城中へと引き入りける。

其の翌日、城の追手に三本傘の紋書きたる旗と、同じき紋の幕とを引いて、これこそ皆名越殿より賜はつて候ひつる御旗にて候へ。御紋付いて候間他人の爲には無用に候。御内の人々これへ御入り候て召され候へかし」と云つて、同音にぞつと笑ひければ、天下の武士共これを見て、あはれ名越殿の不覺や」と、口々に云はぬ者こそ無かりけ

三本傘
傘を三本組み合
せたる紋章。

れ。

やたけに
彌猛に、勇み猛
つて。

名越一家の人々、此のことを聞いて安からぬ事に思はれければ、當
手の軍勢共一人も残らず城の木戸を枕にして討死をせよ」とぞ下知
せられける。これに依つてかの手の兵五千餘人、思ひ切つて、討てど
も射れども用ひず、乗越えく城の逆茂木一重引破つて、切岸の下ま
でぞ攻めたりける。されども岸高うして切り立つたれば、やたけに
思へども上り得ず、唯徒らに城を睨み忿を押へて息つき居たり。此
の時城の中より、切岸の上に横たへ置きたる大木十許り切つて落し
懸けたりける間、將棊倒しをする如く、寄手四五百人壓に討たれて死
ににけり。これにちがはんとしどろに成つて騒ぐ處を、十方の櫓よ
り指落し、思ふさまに射ける間、五千餘人の兵共殘少なに討たれて、其
の日の軍は果てにけり。誠に志の程は猛けれども、唯仕出でたるこ
ともなくて若干討たれにければ、「あはれ恥の上の損かな」と、諸人の

ちがはんと
はづれようと。
あたらぬやうし
しよう。

口遊くちうはなほ止まず。世の常ならぬ合戦の體を見て、寄手も侮りにく
ゝや思ひけん、今は始のやうに勇み進んで攻めんとする者もなかり
けり。

長崎四郎左衛門尉此の有様を見て、此の城を力攻にすることは、人
を討たるゝばかりにて其の功成り難し。唯とり巻いて食攻じきぶにせよ。」
と下知して、軍を止められければ、徒然に皆堪へ兼ねて、花の下の連歌
師どもを呼び下し、一萬句の連歌をぞ始めたりける。其の初日の發
句をば長崎九郎左衛門尉師宗、

さきがけてかつ色みせよ山櫻

としたりけるを、脇の句に工藤二郎左衛門尉

嵐や花のかたきなるらん。

とぞ附けたりける。誠に兩句ともに詞の縁巧にして、句の體は優な
れども、御方をば花になし、敵を嵐に喩へけるは、禁忌なりける表示か

花の下
連歌に秀でたる
一團體の稱。

百服茶

茶會の一種。茶の湯を品評し、賭物をなして勝負を決するもの。

褒貶の歌合

和歌を雙方に分けて評する式。

疊楯

疊番してのべたよみの自在な楯。

なと、後にぞ思ひ知られける。大將の下知に随つて軍勢皆軍を止めければ、慰む方や無かりけん、或は碁雙六を打つて日を過ごし、或は百服茶・褒貶の歌合などを翫んで夜を明かす。是にぞ城中の兵はなか／＼悩まざる、心地して遣る方も無かりける。少しほど経て後、正成いであらば又寄手をたばかりて居眠さまさん。とて芥をもつて人長に人形を二三十作つて、甲冑をきせ、兵仗を持たせて、夜中に城の麓に立て置き、前へ疊楯をつき雙べ、其のうしろにすぐりたる兵五百人を交へて夜のほの／＼と明け、霧の下より、同時に関をどつと作る。四方の寄手関の聞いて、すはや城の中より打出でたるは、これこそ敵の運の盡くる所の死狂ひよ。とて我先にとぞ攻め合せける。城の兵はかねて巧みたることなれば、矢軍ちとす様にして、大勢相近づけば、人形ばかりを木隠れに残し置いて、兵は皆々次第々々に城の上に引きのぼる。寄手人形を實の兵ぞと心得て、

是を撃たんと相集る。正成所存の如く敵たばかり寄せて、大石を四五十、一度にばつと發す。一所に集つたる敵三百餘人、矢庭に打殺され、半死半生の者五百餘人に及べり。軍果て、之を見れば、あつばれ大剛の者かなと覺えて、一足も引かざりつる兵、皆人にはあらで、藁にて作れる人形なり。之を討たんと相集つて石に打たれ矢に當つて死せるも高名ならず、又之を危みて進み得ざりつるも、臆病の程顯れていふ甲斐なし。唯兎にも角にも萬人の物笑ひとぞなりにける。是より後は愈々合戦を止めける間、諸國の軍勢唯徒らに城を守り上げて居たるばかりにて、するわざ一つも無かりけり。こゝに如何なる者か詠みたりけん、一首の古歌を翻案して、大將の前にぞ立てたりける。

よそにのみ見てや止みなん葛城の

たかまの山のみねの楠の木

古歌

よそにのみ見てや止みなん葛城の高間の山の峰の白雲（新古今集）葛城大和國にあり。

その第一の峯を
高間山といふ。

太平記鈔 勤王讀本

八二

同じき三月四日關東より飛脚到來して、軍を止めて徒らに日を送ること然るべからずと下知せられければ、宗徒の大將達評定有つて、御方の向陣と敵の城との間に高く切り立てたる堀に橋を渡して、城へ討ち入らんとぞ巧まれける。これが爲に京都より番匠を五百餘人召し下し五六八九寸の材木を集めて、廣さ一丈五尺、長さ二十丈餘りに梯をぞ作らせける。梯既に作り出しければ、大繩を二三千筋つけて車を以て巻き立て、城の切岸の上へぞ倒し懸けたりける。魯般が雲の梯もかくやと覺えて巧なり。やがてはやりをの兵共五六千人橋の上を渡り、我先にと前んだり。あはや此の城只今うち落されぬと見えたる處に、楠豫て用意やしたりけん、投松明のさきに火を付けて、橋の上に薪を積めるが如くに投げ集めて、水弾きを以て油を瀧の流るゝやうにかけたる間、火橋桁に燃えついて、溪風炎を吹き布いたり。怒に渡りかゝりたる兵ども、前へ進まんとすれば、烈火盛に燃

魯般

支那楚の人。雲梯の機械を作つた。

八大地獄

等活・黒繩・衆合・叫喚・大叫・喚・焦熱・大焦熱・無間。

轉漕
水陸の運送。

えて身を焦す。歸らんとすれば、後陣の大勢前の難儀をも云はず支へたり。側へ飛びおりんとすれば谷深く巖そびえて肝を冷し、如何せんと身を揉うで押しあふ程に、橋桁中より燃え折れて谷底へどうと落ちければ、數千の兵同時に猛火の中へ落ち重なつて、一人も残らず焼け死にけり。其の有様、偏に八大地獄の罪人の刀山劍樹につらぬかれ、猛火鐵湯に身を焦すらんも、かくやと思ひ知られたり。さる程に吉野・十津河・宇多・宇智郡の野武士ども、大塔宮の命を含んで相集る事七千餘人、こゝの峯、かしの谷に立隠れて、千劔破の寄手どもの路を差塞ぐ。これに依つて諸國の兵の兵糧忽ちに盡きて、人馬共に疲れければ、轉漕に怵へ兼ねて、百騎、二百騎引いて歸る處を、案内者の野武士ども處々のつまりゝに待ちうけて討ち留めける間、日々夜々に討たるゝ者數を知らず。希有にして命ばかりを助かるものは、馬・物・具を捨て、衣裳を剥ぎ取られて裸なれば、或は破れたる蓑

千劔破城の戦

八三

を身に纏ひて膚ばかりを隠し、或は草の葉を腰に巻いて恥をあらはせる落人ども、毎日引きも切らず十方へ逃げ散る。前代未聞の恥辱なり。されば日本國の武士共の重代したる物具、太刀、力は、此の時に至つて失せにけり。軍勢ども親討たるれば子は誓を切つてうせ、主疵を被れば郎從助けて引きかへす間、始は八十萬騎と聞えしかども、今は纔かに十萬餘騎になりにけり。

一五 船上の行幸

畿内の軍未だ靜かならざるに、又四國・西國日を追つて亂れければ、人皆薄氷を履む心地して、國の危きこと深淵に臨むが如し。「抑今かくの如く天下亂るゝことは、偏に主上の宸襟より事起れり。もし逆徒さしちがうて奪ひ取り奉らんとすることもこそあれ、相構へてよく警固仕るべし」と、隱岐判官が方へ下知せられければ、判官近國

薄氷を履む
戰々兢々、如
臨深淵、如履
薄氷。(詩經)

隱岐判官
佐々木清高。

閏二月

元弘三年。

佐々木

三郎左衛門尉義
綱。

の地頭・御家人を催して日番夜廻際もく、宮門を閉ぢて警固し奉る。

閏二月下旬は佐々木富士名判官が番にて、中門の警固にて候ひけるが、如何思ひけん、あはれ此の君を取り奉つて義兵を起さばやと思ふ心ぞつきにける。されども申し入る可き便もなく、案じ煩ひける處に、或夜御前より官女を以て御盃を下されたり。判官これを賜はりて、よき便なりと思ひければ、潜かに彼の官女をもつて申し入れけるは、「上様には未だしろしめされず候やらむ。楠兵衛正成金剛山に城を構へてたて籠り候ひし處に、東國勢百萬餘騎にて上洛し、去る二月の初より攻め戦ひ候へども、城は剛うして寄手已に引色になつて候。又備前には伊東大和、二郎三石と申す處に城を構へて、山陽道を差塞ぎ候。播磨には赤松入道圓心宮の令旨をたまはつて攝津國まで攻め上り、兵庫の北、摩耶と申す所に陣を取つて候。其の勢三千餘騎、京を締め地を略して勢近國に振ひ候なり。四國には河野の一

三石

備前和氣郡三石

赤松圓心

則村。

宮

大塔宮。

摩耶

攝津國の耶山。

土居二郎
通治。
得能彌三郎
通言。

千波湊
隱岐國にある小
港灣。

鹽冶判官
高良。

族に土居二郎得能彌三郎御方に参りて旗を擧げ候處に、長門探題上野介時直彼に打負けて行方を知らず落ち行き候ひし後、四國の勢悉く土居得能に屬し候間、既に大船を揃へて是へ御迎に参るべしとも聞え候。又まづ京都を攻むべしとも披露す。御聖運開かるべき時已に至りぬところ覺えて候へ。義綱が當番の間に、忍びやかに御出で候ひて、千波湊より御船に召され、出雲伯耆の間、何れの浦へも風に任せて御船を寄せられ、さりぬべからんずる武士を御憑み候て、暫く御待ち候へ。義綱恐れながら攻めまゐらせんために罷り向ふ體にて、臆て御方に参り候べしとぞ奏し申しける。

官女此の由申し入れければ、主上なほも、彼偽つてや申すらんと思召されける間、義綱が志のほどをよく伺ひ御覽ぜられん爲に、さらば汝先づ出雲國へ越えて、同心すべき一族を語らひて、御迎に参れ」と仰せ下されけるほどに、義綱即ち出雲へ渡つて、鹽冶判官を語らふ

三位殿の御局
藤原廉子。皇太子
桓眞親王及び
後村上天皇の御
母。
忠顯
參謀源忠顯。
有忠の子。

に鹽冶如何思ひけん、義綱を追籠め置きて、隱岐國へ歸さず。主上姑くは義綱を御待ちありけるが、餘りに事滞りければ、たゞ運に任せて御出あらんと思召して、或夜の宵の紛れに、三位殿の御局の御産の事近づきたりとして、御所を御出ある由にて、主上其の御輿にめされ、六條少將忠顯朝臣ばかり召具して、潛かに御所をぞ御出ありける。此の體にては人の怪しみ申すべき上、駕輿丁も無かりければ、御輿をば停められて、忝くも十善の天子自ら玉趾を草鞋の塵に汚し、泥土の地を踏ませ給ひけるこそ淺ましけれ。

比は三月二十三日の事なれば、月待つ程の暗き夜に、そことも知らぬ遠き野の道をたどりて歩ませ給へば、今は遙かに來ぬらんと思召されたれども、跡なる山は未だ瀧の響の風に聞ゆるほどなり。若し追つ懸けまゐらす事もやあるらんと、恐しく思召しければ、一足も前へと御心ばかりは進めども、いつ習はせ給ふべき道ならねば、夢路

をたどる心地して、唯一所にのみ休らはせ給へば、こは如何せんと思ひ煩ひて、忠顯朝臣御手を引き、御腰を推して、今夜いかにもして湊の邊までと心を遣り給へども、心身共に疲れ果て、野徑の露に徘徊す。夜いたく更けにければ、里遠からぬ鐘の聲の月に和して聞えけるを道しるべに尋ね寄りて、忠顯朝臣ある家の門を叩き、千波湊へは何方へ行くぞ。」と問ひければ、内より怪しげなる男一人出でむかひて、主上の御有様を見まゐらせけるが、心なき田夫野人なれども、何となく痛はしくやおもひまゐらせけん、千波湊へはこれよりわづか五十町ばかり候へども、道南北へ分れて如何様御迷ひ候ひぬと存じ候へば、御道しるべ仕り候はん。」と申して、主上をかるがると負ひまゐらせ、ほどなく千波湊へぞ着きにける。爰にて時打つ鼓の聲を聞けば、夜は末だ五更の初なり。此の道の案内者仕りたる男、かひくしく湊の中を走り廻つて、伯耆國へ漕ぎもどる商人船のありけるを、とかく語ら

五更
今の午前四時

ひて、主上を屋形の内に乘せまゐらせて、其の後暇申してぞ止りける。此の男誠に凡人にあらざりけるにや、君御一統の御時に、尤も抽賞あるべしとて國中を尋ねられけるに、「我こそそれにて候へ。」と申す者遂に無かりけり。

夜も己に明け、ければ、船人纜を解いて順風に帆を揚げ、湊の外に漕ぎ出す。船頭主上の御有様を見奉つて、凡人にては渡らせ給はじと思ひけん、屋形の前に畏つて申しけるは、「斯様の時御船を仕つて候こそ、我等が生涯の面目にて候へ。何處の浦へ寄せよとも御詫にされたがつて御船の舵をば仕り候べし。」と申して、實に他事もなげなる氣色なり。忠顯朝臣之を聞き給ひて、隠しては中々悪しかりぬと思はれければ、此の船頭を近く呼び寄せて、「是程に推當てられぬる上は何をか隠すべき、屋形の中に御座あるこそ日本國の主、忝くも十善の君にていらせ給へ。汝等も定めて聞き及びぬらん、去年より隠岐判

取舵面舵

船の軸を左方へ向けんとする時の舵を取舵といひ、右方へ向けんとする時の舵を面舵といふ。

あひ物

乾魚の類。

官が館に押籠められて御座ありつるを、某が盗み出しまゐらせたるなり。出雲伯耆の間に何處にてもさりぬべからんずる泊へ、急ぎ御船を着けておろしまゐらせよ。御運開けなば必ず汝を侍に申しなして、所領一所の主になすべし。」と仰せられければ、船頭實に嬉しげなる氣色にて、取舵面舵取合せて片帆にかけてぞ馳せたりける。
今や海上二三十里も過ぎぬらんと思ふ所に、追風に帆懸けたる船十艘ばかり出雲伯耆を指して馳せ來れり。筑紫船かと思ればさもあらで、隠岐判官清高が主上を追ひ奉る船にてぞありける。船頭之を見て、かくては叶ふまじ。「これに御隠れ候へ。」と申して、主上と忠顯朝臣とを船底に宿しまゐらせて、其の上にあひものとして乾したる魚の入りたる俵を取り積んで、水手舵取其の上に立ち竝んで、櫓をぞ押したりける。さるほどに、追手の船一艘御座船に追つついて屋形の中に乗り移り、こゝかしこ搜しけれども見出し奉らず。「さては此の

上臈

貴き身分の人。

船には召さざりけり。若し怪しき船や通りつる。」と問ひければ、船頭「今夜の子の刻ばかりに千波湊を出で候ひつる船にこそ、京上臈かと思しくて、冠とやらん着たる人と、立烏帽子着たる人と二人乗らせ給ひて候ひつれ。其の船今は五六里も先立ち候ひぬらん。」と申しければ、「さては疑もなきことなり。はや船をおせ。」とて、帆を引き舵を直せば、此の船は聽て隔りぬ。

佛舍利

釋迦佛の遺骨。

今はかうと心安く覺えて、跡の浪路を顧みれば、又一里許りさがり、追手の船百餘艘、御座船を目に懸けて鳥の飛ぶが如くに追つかけたり。船頭之を見て、帆の下に櫓を立て、萬里を一時に渡らんと、聲を帆に擧げて推しけれども、折節風たゆみ、潮に向つて、御船更に進まず。水手舵取如何せんとあわて騒ぎける間、主上船底より御出あつて、膚の御護より佛舍利を一粒取り出させ給ひて、御疊紙に載せて、波の上にぞ浮べられける。龍神是を納受やしたりけん、海上俄かに風替つ

て、御座船をば東へ吹き送り、追手の船をば西へ吹き戻す。さてこそ主上は虎口の難を御遁れあつて、御船は時の間に伯耆國名和湊に着きにけれ。

六條少將忠顯朝臣一人まづ船よりおり給ひて、此のあたりには如何なる者か弓矢取つて人に知られたる。と問はれければ、道行く人立休らつて、此のあたりには名和又太郎長年と申す者こそ、其の身さして名ある武士にては候はねども、家富み一族廣うして、心がさある者にて候へ。とぞ語りける。忠顯朝臣よく、其の仔細を尋ね聞きて、聽て勅使を立て、仰せられけるは、主上隠岐判官が館を御遁れ有つて、今此の湊に御座あり。長年が武勇の事かねて上聞に達したる間、御憑みあるべき由を仰出さるゝなり。憑まれ進らせ候べしや、否や。速かに答申すべし。とぞ仰せられたりける。

名和又太郎は、折節一族ども呼び集めて酒宴して居たりけるが、此

名和又太郎
長年
初の名は長高。
心がさある者
心のはたらきが
あるもの。

舍弟
實は弟の子。
長年
長義—長重

船上山
又センジャウセ
ン。伯耆國にあ
る山。

腹巻
鎧の一種。背で
あはせるもの。
高紐
鎧の綿上にあつ
て胴を釣る紐。

のよしを聞きて案じ煩ひたる氣色にて、兎も角も申し得ざりけるを、舍弟小太郎左衛門尉長重進み出でて申しけるは、古より今に至るまで、人の望む所は名と利との二つなり。我等忝くも十善の君に憑まれ進らせて、屍を軍門に曝すとも名を後代に残さんこと、生前の思出、死後の名譽たるべし。唯一筋に思ひ定めさせ給ふより外の儀あるべしとも存じ候はず。と申しければ、又太郎をはじめとして當座に候ひける一族ども二十餘人、皆此の議に同じてけり。さらば頓て合戦の用意候べし。定めて追手も跡よりかゝり候ふらん。長重は主上の御迎に参りて、直ちに船上山へ入れまゐらせん。方々はやがて打立つて船上へ御参り候べし。と云ひ捨て、鎧一縮して走り出でければ、一族五人、腹巻取つて投げかけ、皆高紐しめて、共に御迎にぞ参じける。

俄かのことに御輿なども無かりければ、長重着たる鎧の上に

荒薦を巻いて、主上を負ひまゐらせ、鳥の飛ぶが如くして船上へ入れ奉る。長年近邊の在家へ人を廻し、思ひ立つことあつて、船上へ兵糧を上ぐるこゝとあり。我が倉の内にある所の米穀を一荷持つて運びたらんものには、錢を五百づつ取らすべしと觸れたりける間、十方より人夫五六千人出で來つて、我劣らじと持ち送る。一日が内に兵糧五千餘石運びけり。其の後、家中の財寶悉く人民百姓に與へて、己が館に火をかけ、其の勢百五十騎にて船上に馳せ参り、皇居を警固仕る。長年が一族名和七郎といひける者、武勇の謀ありければ、白布の五百反ありけるを旗に拵へ、松の葉を焼いて煙にふすべ、近國の武士どもの家々の紋を書いて、こゝの木の本、彼處の峯にぞ立て置きける。此の旗ども峯の嵐に吹かれて陣々に翻りけるさま、山中に大勢充滿したりと見えて夥し。

名和七郎
國高。

佐々木彈正左
衛門尉
昌綱なり。

かい楯
城の上にかぎ置
ける楯。

一六 船上合戦

さる程に同二十九日、隱岐の判官、佐々木彈正左衛門尉、其の勢二千餘騎にて南北より押寄せたり。此の船上と申すは、北は大山に續き、時ち三方は地僻に、峯に懸れる白雲腰を繞れり。俄に拵へたる城なれば、未だ堀の一所をも掘らず、堀の一重をも塗らず、唯所々に大木少々伐り倒して、逆茂木にひき、房舎の藁を破つて、かい楯にかけるばかりなり。

寄手三千餘騎、坂中まで攻上つて、城中をきつと見上げたれば、松柏生ひ茂つていと深き木蔭に、勢の多少は知らねども、家々の旗四五百旒、雲に翻り日に映じて見えたり。さてははや近國の勢どもの悉く馳せ参りたり。此の勢ばかりにては攻め難しとや思ひけん、寄手皆心に危みて進み得ず。城中の勢共は、敵の勢に分際を見えじと、木

ぬはれ伏して
あちらこちらに
かくれ伏す。

蔭にぬはれ伏して、時々射手を出し、遠矢を射させて日を暮す。かゝる所に一方の寄手なりける佐々木彈正左衛門尉遙の麓に控へて居たりけるが、何方より射るとも知らぬ流矢に、右の眼を射ぬかれて矢庭に伏して死にけり。是に依つて其の手の兵五百餘騎、色を失ひて戦をもせず。佐渡前司は八百餘騎にて搦手へ向ひたりけるが、俄に旗を巻き甲を脱いで降参す。隠岐の判官は、猶かやうの事をも知らず、搦手の勢は定めて今は攻め近づきぬらんと心得て、一の木戸口に支へて、新手を入れかへ、時の移るまでぞ攻めたりける。日已に西山に隠れなんとしける時、俄に天かき曇り風吹き雨降る事、車軸の如く、雷の鳴ること山を崩すが如し。寄手是におぢわなゝいて、此處彼處の木蔭に立ち寄りて群り居たる所に、名和又太郎長年、舍弟太郎左衛門尉長重、小次郎長生が、射手を左右に進めて散々に射させ、敵の楯の端のゆるぐ所を得たりやかしこしと抜きつれて打つてかゝる。

車軸の如く

大雨の様。
注：大雷雨、其滴
甚、或如車
軸。
(法苑珠林)

幢
はたのついたは
こ。

大手の寄手千餘騎、谷底へ皆まくり落されて、己が太刀長刀に貫かれ、命を墜す者、其の數を知らず。隠岐の判官ばかり辛き命を助かり、小舟一艘に取り乗り、本國へ逃げ歸りけるを、國人いつしか心變りして、津々浦々を堅め防ぎける間、波に任せ風に隨ひて、越前の敦賀へ漂ひよりたりけるが、幾程もなくして、六波羅没落の時、江州番場の辻堂にて腹搔切つて失せにけり。世澆季に成りぬと云へども、天理未だありけるにや、餘りに君を惱し奉りける隠岐の判官が、三十餘日の間に滅びはて、首を軍門の幢はたに懸けられけるこそ不思議なれ。主上隠岐國より還幸成りて、船上に御座ありと聞えしかば、國々の兵どもの馳参ること引きも切らず。四國九州の兵までも聞傳へ傳へ、我先にと馳参りける間、其の勢船上に居餘りて、四方の麓二三里は、木の下草の蔭までも、人ならざる所はなかりけり。

稻村崎

相模國七里ヶ濱の東。

一七 稻 村 崎

新田義貞數度の戰に打勝ち給ひぬと聞えしかば、東八箇國の武士共、隨ひ付くこと雲霞の如し。關戸に一日逗留あつて軍勢の着到をしるされけるに、六十萬七千餘騎とぞ註せらる。こゝにて此の勢を三手に分けて各二人の大將を差副へ三軍の師を司らしむ。其の一方には大館二郎宗氏を左將軍として江田三郎行義を右將軍とす。其の勢すべて十萬餘騎、極樂寺の切通へぞ向はれける。一方には堀口三郎貞滿を上將軍とし、大島讚岐守守之を裨將軍として、其の勢都合十萬餘騎、巨福呂坂へ指し向けらる。其の一方には、新田義貞・義助、諸將の命を司つて、堀口・岩松等の一族を前後左右に圍ませて、其の勢五十萬七千餘騎、假粧坂よりぞ寄せられける。さる程に、極樂寺の切通へ向はれたる大庭二郎宗氏、本間に討たれ

巨福呂・假粧

共に鎌倉への入口。

本間
山城左衛門。

二十一日
元弘三年五月。

て兵ども片瀬腰越まで引退きぬと聞えければ、新田義貞、兵二萬餘騎を率して、二十一日の夜半ばかりに、片瀬腰越をうち廻り、極樂寺坂へ打蒞み給ふ。明け行く月に敵の陣を見給へば、北は切通まで山高く路峻しきに、木戸をかまへ垣楯をかい、て數萬の兵陣を並べてなみ居たり。南は稻村崎にて沙頭路狭きに浪打ち涯まで逆茂木を繁く引懸けて、沖四五町が程に大船どもをならべて、矢倉をかきて横矢に射させんと構へたり。

實にもこの陣の寄手、叶はで引きぬらんも理なりと見給ひければ、義貞馬より下り給ひて、冑を脱いで海上を遙々と伏し拜み、龍神に向つて祈誓し給ひけるは、傳へ承る日本開闢の主、伊勢の天照大神は、本地を大日の尊像に隠し、垂跡を滄海の龍神に顯し給へりと、吾君其の苗裔として、逆臣の爲に西海の浪に漂ひ給ふ。義貞今臣たる道を盡さん爲に斧鉞を把つて敵陣に臨む。其の志偏に王化を資け奉つて

龍神
水の神。

蒼生を安からしめんとなり。仰ぎ願くば内海外海の龍神、臣が忠義を鑑みて潮を萬里のほかに退け、道を三軍の陣に開かしめ給へ」と、至信に祈念し、自ら佩き給へる金作（こがね）の太刀を抜きて海中へ投げ給ひけり。眞に龍神納受やし給ひけん、其の夜の月のいり方に、前々更に干ることもなかりける稻村崎、俄に二十餘町干上り平沙渺々たり。横矢射んと構へぬる數千の兵船も、落ち行く潮に誘はれて、遙の沖に漂へり。不思議といふも類なし。義貞これを見給ひて、傳へ聞く、後漢の貳師將軍は城中に水盡き渴に攻められける時、刀を抜いて岩石を刺し、かば飛泉俄に涌き出でき。我朝の神功皇后は、新羅を攻め給ひし時、自ら干珠を取り海上に擲げ給ひしかば、潮水遠く退いて終に戰に勝つ事を得しめ給ふと。是和漢の佳例にして、古今の奇瑞に相似たり、進めや者共、と下知せられければ、江田・大館・里見・山名の人々を始として、越後・上野・武藏・相摸の軍勢共六萬餘騎を一手になして、稻村

貳師將軍
李廣

崎の遠干渴を眞一文字にかけ通りて鎌倉中へ亂れ入る。(刪修)

一八 御 還 幸

五月十二日
元弘三年。
六波羅
北條高時並にそ
の一族自害せ
り。
瑤輿
たま飾りの御
輿。
天子の御輿。

都には五月十二日千種頭中將忠顯朝臣足利治部大輔高氏赤松圓心入道等、追々早馬を立て、六波羅已に没落せしむるの由船上へ奏聞す。同二十三日船上を御立あつて瑤輿を山陰の東にぞ催されける。

路次の行粧例に替りて、頭大夫行房、勘解由次官光守二人ばかりこそ衣冠にて供奉せられけれ。其の外の月卿雲客衛府諸司の助は、皆戎衣にて前騎後乗す。六軍盡く甲冑を著し、弓箭を帶して前後三十餘里に支へたり。鹽冶判官高貞は、千餘騎にて、一日先立つて前陣を仕る。又朝山太郎は、一日路ひき遅れて五百餘騎にて後陣に打ちけり。金持大和守錦の御旗を差して左に候し、伯耆守長年は帶劍の役

雨師
雨の神。
風伯
風の神。
紫微北辰
共に北斗星。

にて右に副ふ。雨師道を清め風伯塵を拂ふ。紫微北辰の供陣もかくやと覺えて嚴重なり。されば去年隱岐國移されさせ給ひし時、そぞろに宸襟を惱まされて、御涙のもととなりし山雲海月の色、今は龍顔を悦ばしむる端となつて、松吹く風も自ら萬歳を呼ぶかと怪しまれ、鹽焼く浦の煙まで、にぎはふ民の竈となる。(刪修)

一九 正成兵庫へ參向

兵庫に一日御逗留あつて六月二日瑠輿を廻らさるゝ處に、楠多門兵衛正成七千餘騎にて參向す。其の勢殊に勇々しくぞ見えたりける。主上御簾を高く捲かせて正成を近く召され、大義早速の功、偏に汝が忠戦にあり、と感じ仰せられければ、正成畏つて是君の聖文神武の徳に依らずんば、微臣いかでか尺寸の謀を以て強敵の圍を出づべく候はんや、と功を辭して謙下す。兵庫を御立ありける日より正成

威揚
なのとまさかり。
五雲
五色の雲、即天子の御車。

前陣を承つて畿内の勢を相隨へ、七千餘騎にて前驅す。其の道十八里が間、干戈威揚相挟み、左輔右弼列を引き六軍次を守り、五雲閑に幸し、六月五日の暮程に東寺まで臨幸成りければ、武士たる者は申すに及ばず、攝政關白太政大臣左右の大將、大中納言、内外の諸司、醫陰の兩道に至るまで、我劣らじと參り集りしかば、車馬門前に群集して地府に雲を布き、青紫堂上に陰映して天極に星を列ねたり。翌六日東寺より二條の内裏へ還幸成る。凡路次の行粧、行列の儀式、前々の臨幸に事替つて百司の守衛嚴重なり。見物の貴賤衢に満ちて、唯帝徳を頌し奉る聲洋々として耳に盈てり。(刪修)

二〇 尊氏東上 櫻井の訣別

尊氏直義大勢を率して上洛の間、要害の地に於て防ぎ戦はんために、兵庫に引退きぬるよし、義貞朝臣早馬をまゐらせて、内裏に奏聞あ

りければ、主上大に御騒ぎあつて、楠判官正成を召されて、「急ぎ兵庫へ罷下り義貞に力をあはせて合戦を致すべし」と仰せられければ、正成畏つて奏しけるは、「尊氏卿すでに筑紫九國の勢を率して上洛候ふなれば、定めて勢は雲霞の如くにぞ候ふらん。御方の疲れたる小勢をもつて敵の機に乗つたる大勢に懸合つて、尋常の如くに合戦を致し候はゞ、御方決定打負け候ひぬと覚え候ふなれば、新田殿をも唯京都へ召し候て、前の如く山門へ臨幸成り候べし。正成も河内へ罷下り候て、畿内の勢を以て河尻を差塞ぎ、兩方より京都を攻めて矢糧をつからかし候ほどならば、敵は次第に疲れて落下り御方は日々に隨つて馳集り候べし。其の時に當つて新田殿は山門より押寄せられ、正成は搦手にて攻上り候はゞ、朝敵を一戦に滅すことありぬと覚え候。新田殿も定めて此料簡候とも、路次にて一戦もせざらんは無下にいふ甲斐なく人の思はんずるところを恥ぢて兵庫に支へられたりと

覚え候。合戦は兎に角にも始終の勝こそ肝要にて候へ、よく遠慮を廻らされて公議を定めらるべきにて候。」と申しければ、「誠に軍旅のことは兵に譲られよ。」とて、諸卿僉議ありけるに、かさねて坊門宰相清忠申されけるは、「正成が申す所もその謂ありといへども、征伐のためには差下されたる節度使、未だ戦を成さざる前に帝都を捨て、一年の内に二度まで臨幸ならんこと、且は帝位の輕きに似、又は官軍の道を失ふ處なり。たとひ尊氏筑紫勢を率して上洛すとも、去年東八箇國を順へて上りし時の勢にはよも過ぎじ。凡そ戦の始より敵軍敗北の時に至るまで、御方小勢なりといへども、毎度大敵を攻め靡けずと云ふことなし。是全く武略の勝れたる所にはあらず、唯聖運の天に叶へる故なり。然れば唯戦を帝都の外に決して敵を鐵鉞の下に滅さんこと、何の仔細かあるべきなれば、唯時を替へず楠罷下るべし。」とぞ仰出されける。

五月十六日
延元元年。

正成此の上はさのみ異議を申すに及ばずとて、五月十六日都を立つて五百餘騎にて兵庫へぞ下りける。正成是を最後の合戦と思ひければ、嫡子正行が今年十一歳にて供したりけるを、思ふ様ありとて櫻井の宿より河内へ返し遣はすとて、庭訓を殘しけるは、「獅子子を産んで三日を経る時數千丈の石壁より是を擲ぐ。其の子獅子の機分あれば、教へざるに中より跳返りて、死することを得ずといへり。况や汝己に十歳に成りぬ。一言耳に留らば、我教誡に違ふ事なかれ。今度の合戦天下の安否と思ふ間、今生にて汝が顔を見んこと、是を限と思ふなり。正成己に戦死すと聞きなば、天下は必ず將軍の代に成りぬと心得べし。然りといへども一旦の身命を助らんために、多年の忠烈を失ひて降人に出づる事あるべからず。一族若黨の一人も死殘つてあらんほどは、金剛山の邊に引籠つて、敵寄せ來らば、命を養由が矢さきに懸けて、義を紀信が忠に比すべし。是ぞ汝が第一の孝行

養由

淮南子に
養由基、楚將、
善射、去、楊葉、

百步射之、百發
百中とあり。

前聖云々

前聖後聖一揆
揆(五字)一揆
は趣を同じくす
ること。

ならんずる。と泣くく、申含めて各東西へ別れにけり。昔の百里奚は、穆公、晉の國を伐ちし時、戦に利なからんことを鑒みて、其の將孟明視に向つて、今を限の別と悲しみ、今の楠判官は、敵軍都に近づくと聞きしより國必ず滅びん事を愁へて、其の子正行を留めて、なき跡までの義を勸む。彼は異國の良弼、是は吾朝の忠臣、時千載を隔つといへども前聖後聖一揆にして有難かりし賢佐なり。

正成兵庫に着きければ、新田左中將やがて對面し給ひて、叡慮の趣をぞ尋問はれける。正成畏つて所存の通と勅定の様とを委しく語り申しければ、誠に敗軍の小勢をもつて、機を得たる大敵に戦はんこと叶ふべきにてはなけれども、去年關東の合戦に打負けて上洛せしとき、路にて猶支へざりしこと人口の嘲、遁るゝ所を得ず。それこそあらめ、今度西國へ下されて數箇所城郭一も落し得ずして、結句敵の大勢なるを聞きて、一支もせず京都まで遠引したらんは、餘りに云

甲斐なく存ずる間、戦の勝負をば見ずして、たゞ一戦に義を勵まばやと存ずるばかりなり。」と宣ひければ、正成重ねてまうしけるは、衆愚の愕々たるは一賢の唯々には如かずと申し候へば、道を知らざる人の讒をば必らずしも御心に懸けらるまじきにて候。唯戦ふべき所を見て進み、叶ふまじき時を知つて退くをこそ、良將とは申し候なれ。

暴虎憑河

暴虎憑河、死而無悔者、吾不與也。(論語)

平太守

北條高時。

さてこそ暴虎憑河死すとも悔ゆる無き者には與せずと孔子も子路を誡められし事の候。其の上元弘の初には平太守の威猛を一時にくだかれ、此の年の春は尊氏の逆徒を九州へ退けられ候ひし事、聖運とは申しながら偏に御計略の武徳に依りし事にて候へば、合戦の道に於ては誰れか貶し申し候べき。殊更今度西國より御上洛の事、御沙汰の次第、一々に道に當つてこそ存じ候へ。」と申しければ、義貞朝臣誠に顔色解けて、よもすがらの物語に數盃の興をぞ添へられける。後に思ひ合はすれば、是を正成が最期なりけりと、哀なりしことどもなり。

淡路の瀬戸

明石海峡。

さる程に、明くれば五月二十五日辰の刻に、沖の霞の晴れ間より幽に見えたる船あり。いさりに歸る海人か、淡路の瀬戸を渡る船かと海邊の眺望を詠めて、潮路遙かに見渡せば、取梶面梶に搔楯かいて、艫軸に旗を立てたる數萬の兵船、順風に帆をぞ舉げたりける。煙波渺渺たる海の面、十四五里が程に漕連ねて、舷を輾り、艫軸を並べたれば海上俄に陸地に成つて、帆影に見ゆる山もなし。海上の兵船、陸地の大勢、思ひしよりも夥しくして、聞きしにも猶過ぎたれば、官軍御方を顧みて、退屈してぞ覺えける。

されど義貞朝臣も正成も、大敵を見ては欺き、小敵を見ては侮らざる勇者なれば、少しも機を失ひたる氣色なうして、先づ和田崎の小松原に打出で、閑に手分をぞし給ひける。楠判官正成は態と他の勢を交へずして、七百餘騎、湊川の西の宿に控へて、陸地の敵に相向ふ。

胡録 えびら。矢を盛りて背に負ふ器。
 天維 天をつなげる大綱。
 坤軸 地軸。

左中將義貞は、總大將にておはすれば、諸將の命を司つて其の勢三萬五千餘騎和田崎に帷幕を引かせて控へらる。さる程に、海上の船ども帆を下して磯近く漕寄すれば、陸地の勢も旗を進めて相近にぞなりにける。兩陣互に攻寄せて、先づ沖の船より太鼓を鳴らし、関の聲を揚ぐれば、陸地の搦手五十萬騎、請取つて聲をぞ合せける。其の聲三度畢れば、官軍又五萬餘騎、楯の端を鳴らし、胡録を敲いて関を作る。敵御方の関の聲、南は淡路・繪島が崎、鳴戸沖、西は播磨路・須磨浦、東は攝津國・生田森、四方三百餘里に響き渡つて、まことに天維も斷えて落ち、坤軸も傾くばかりなり。

二二 湊川の血戦

補判官正成、舍弟帶刀正季に向つて、敵前後を遮つて味方は陣を隔てたり。今は遁れぬ處と覺ゆるぞ。いざや先づ前なる敵を一散ら

左馬頭 足利尊氏の弟直義。

合はぬ敵 相手にならぬ敵。

石づき 長刀の本をつみたる金具。

し追捲くつて後なる敵に戦はん」と申しければ、正季、然るべく覺え候。一同じて七百餘騎を前後に立て、大勢の中へ懸入りける。左馬頭の兵ども、菊水の旗を見てよき敵なりと思ひければ、取籠めて是を討たんとしけれども、正成、正季、東より西へ破つて通り、北より南へ追靡け、よき敵と見るをば馳雙べて、組んで落ちては首をとり、合はぬ敵と思ふをば一太刀打つてかけちらす。正成と正季と七度合ひて七度分る。其の心偏に左馬頭に近づき、組んで討たんと思ふにあり。遂に左馬頭の五十萬騎、楠が七百騎に懸靡けられて、また須磨の上野の方へぞ引返しける。直義朝臣の乗られたりける馬、蹶を蹄に踏立て、右の足を引きける間、楠が勢に追つ攻められて、己に討たれ給ひぬと見えける處に、藥師寺十郎次郎唯一騎、蓮池の堤にて返合せて、馬より飛んで下り、二尺五寸の小長刀の石づきを取延べて、懸る馬の平頸、むながひの引廻、切つては勿ね倒し、七八騎が程切つて

將軍
足利尊氏。

落しける其の間に、直義は馬を乗替へて、遙々落延びにけり。左馬頭楠に追立てられて引退くを將軍望み見て、新手を入替へて直義討たすなと下知せられければ、吉良・石堂・上杉の人々六千餘騎にて湊河の東へかけ出で、跡を切らんとぞ取巻きける。正成・正季又取つて返して此の勢にかゝり、懸けては打違へて殺し、懸入つては組んで落ち、三時が間に十六度まで闘ひけるに、其の勢次第々々に滅びて、後は纔に七十三騎にぞ成りにける。

此の勢にても打破つて落ちば落つべかりけるを、楠京を出でしよ、世の中の事、今は是迄と思ふ所存ありければ、一足も引かず戦つて、騎已に疲れければ、湊川の北に當つて、在家の一村ありける中へ走り入つて、腹を切らん爲に、鎧を脱いで其の身を見るに、斬創十一箇所までぞ負ひたりける。此の外七十二人の者共も、皆五箇所三箇所の疵を被らぬ者はなかりけり。楠が一族十三人、手の者六十餘人、六間の

手のもの
手兵。
てした部下。

九界
地獄・餓鬼・畜生
修羅・人間・天上
聲聞・緣覺・菩薩
の九つ。

客殿に二行に竝居て、念佛十返ばかり同音に唱へて一度に腹をぞ切つたりける。正成座上に居つゝ、舍弟の正季に向つて、抑最期の一念に依つて善惡の生を引くといへり。九界の間になにか御邊の願なる。と問ひければ、正季からく、と打笑ひて、七生まで唯同じ人間に生れて朝敵を滅さばやとこそ存じ候へ。ともうしければ、正成よに嬉しげなる氣色にて、罪業深き惡念なれども我も斯様に思ふなり。いざさらば同じく生を替へて、此の本懷を達せん。と契つて兄弟共に刺違へて同じ枕に伏しにけり。橋本八郎正員・宇佐美河内守正安・和田五郎正隆を始として、宗徒の一族十六人、相隨ふ兵五十餘人、思ひ思ひに竝居て一度に腹をぞ切つたりける。

菊池七郎武朝は兄の肥前守が使にて須磨口より合戦の體を見に來りけるが、正成が腹を切る所へ行合ひて、をめぐしく見捨て、はいかゞ歸るべきと思ひけるにや。同じく自害して炎の中に伏しに

けり。

抑元弘よりこの方、忝くも此の君に憑まれ進らせて、忠を致し功に誇る者幾千萬ぞや。然れども此の亂又出で来て後、仁を知らぬ者は朝恩を捨て、敵に屬し、勇なき者は、苟くも死を免れんとして刑戮にあひ、智なき者は、時の變を辨ぜずして道に違ふ事のみありしに、智仁勇の三徳を兼ねて死を善道に守るは、古より今に至るまで、正成ほどの者は未だなかりつるに、兄弟共に自害しけるこそ、聖主再び國を失ひて、逆臣横に威を振ふべき其の前表の驗なれ。

一一一 正成が首故郷に送らる

六條川原
京都。
湊川にて討たれし楠判官が首をば、六條川原に懸けられたり。去んぬる春もあらぬ首をかけたなりしかば、是も亦さこそあらめと云ふ者多かりけり。

疑は人によりてぞ残りける

まさしげなるは楠が首

と、狂歌を札に書いてぞ立てたりける。

其の後尊氏楠が首を召されて、朝家私日久しく相馴れし舊好の程も不便なり。跡の妻子ども今一度空しき貌をもさこそ見たく思ふらめ。とて遺跡へ送られける情の程こそありがたけれ。

楠が後室子息正行これを見て、判官今度兵庫へ立ちし時、様々申置きしことども多かる上、今度の合戦に必ず戦死すべし。とて正行を留置きしかば、出でしを限りの別なりとはかねてより思ひまうけたることなれども、貌を見ればそれながら、目塞がり色變じて、替りはてたる首を見るに、悲の心胸に満ちて、歎の涙せきあへず。今年十一歳になりける帶刀、父が首の生きたりし時にも似ぬ有様、母が歎のせん方もなげなる様を見て、流るゝ涙を袖に押へて持佛堂の方へ行きける

遺跡

こゝでは河内國を指す。

後室

未亡人。

判官

正成を指す。

正成が首故郷に送らる

妻戸
家の四隅にある
兩開きの戸。

を、母怪しく思ひて即ち妻戸の方より行き見て見れば、父が兵庫へ向ふ時形見に留めし菊水の刀を右の手に抜き持ちて、袴の腰を押下げて自害をせんとぞし居たりける。

母急ぎ走り寄つて、正行が小腕に取附いて涙を流して申しけるは、「梅檀は二葉より芳しといへり。汝をさなくとも父が子ならば、これ程の理に迷ふべしや。小心にもよくよくこのやうを思うて見よかし。故判官が兵庫へ向ひし時、汝を櫻井の宿より返留めしことは、全く跡を弔はれんためにあらず。腹を切れとて残し置きしにもあらず、『われたたとひ運命盡きて戰場に命を失ふとも、君いづくにも御座ありと承らば、死残りたらん一族若黨どもをも扶持し置き、今一度戦を起し、御敵を滅して、君を御代にも立てまゐらせよ。』と云ひ置きし處なり。此の遺言具に聞きて我にも語りし者が何時の程に忘れけるぞや。かくては父が名を失ひはて、君の御用に合ひ進らせんことあるべしとも覺えず。」と泣くく諫め留めて、抜きたる刀を奪ひとれば、正行腹を切り得ず、禮盤の上より泣倒れ、母と共にぞ歎きける。

禮盤
佛前にありて、
禮拜する臺座。

其の後よりは、正行、父の遺言、母の教訓心に染み肝に銘じつゝ、或時は童共を打倒し、首を取る眞似をして、是は朝敵の首を取るなりといひ、或時は竹馬に鞭を當て、是は將軍を追懸け奉るなど言ひて、はかなき手ずさみに至るまでも、唯此の事をのみ業とせる、心の中こそ恐ろしけれ。

二三 吉野御潛幸

主上
後醍醐天皇。
山門
比叡山延暦寺。
花山院
京都一條にあつた。
霜に響く遠寺の鐘云々
豊嶺九鐘、霜降
自鳴、(山海經)
遺愛寺鐘、枕
聽、(白氏文集)

主上は重祚の御事相違候はじと、尊氏卿様々申されたりし偽の詞を御たのみあつて、山門より還幸成りしかども、元來謀りまゐらせんためなりしかば、花山院の故宮に押し籠められさせ給ひ、宸襟を蕭颯たる寂寞の中に惱まざる。霜に響く遠寺の鐘に御枕を欬て、楓橋の

楓橋の夜の泊
に云々

月落烏啼霜滿天、江楓漁火對愁眠、姑蘇城外寒山寺、夜半鐘聲到客船、唐詩選、張繼、楓橋夜泊、北山の雪云々、香爐峰雪撥簾看、(白氏文集) 梁園の昔の御遊

梁孝王作、離華之宮、築苑、與宮人賓客、戈釣其中、(西京雜記) 寬平の遠き、第五十九代宇多天皇の出家されたことをいふ、花山の近き、第六十五代花山天皇の出家されたことをいふ、

金崎、義貞の東北、その地の城に籠つてゐた。

夜の泊に御哀を副へられ、梢に餘る北山の雪に御簾をかゝげては、梁園の昔の御遊に御涙を催さる。紫宸に星を列ねし百司の老臣も、満天の雲に掩はれ、参り仕ふる人一人もなければ、天下のこと如何になりぬらんと、尋ね聞召さるべきたよりもなし。「そも、朕が不徳何事なれば、かほどに佛神にも放たれ奉つて、逆臣の爲に犯さるらん。」と、舊業の程も淺ましく、この世の中もたのみ少なく思召されれば、寬平の遠き跡をも尋ね、花山の近き例をも追はばやと思召し立たせたまひける處に、刑部大輔景繁武家のゆるしを得て、唯一人伺候したりけるが、勾當内侍をもつて潛に奏聞申しけるは、「越前の金崎の合戦に、寄手毎度打負け候なる間、加賀國、劍、白山の衆徒等御方に参り、富樫介が籠つて候那多城を攻落して、金崎の後攻を仕らんと企て候なり。これを聞きて、還幸の時供奉仕つて、京都へ罷り上り候ひし菊池掃部助武俊、日吉加賀法眼以下、皆己が國々へ逃げ下つて、義兵を擧げ、國中

劍・白山

共に加賀國能美郡にある、劍は今、鶴來と書く、謳歌の説、世上の風説。

を打順へて候なる間、天下の反覆遠からじと、謳歌の説耳に滿ち候。急ぎ近日の間に夜に紛れて大和の方へ臨幸成りさふらうて、吉野十津川の邊に皇居をさだめられ、諸國へ綸旨をなし下され、義貞が忠心をも助けられ、皇統の聖化を輝かされ候へかし。」と、委細にぞ申し入れたりける。

主上ことこの様を具に聞召され、さては天下の武士猶帝徳を慕ふ者多かりけり。これ天照大神の、景繁が心に入り替らせ給ひて、示さるものなりと思召されければ、「明夜必ず寮の御馬を用意して、東の小門の邊に相待つべし。」とぞ仰せ出されける。

相圖の刻限にもなりければ、三種の神器をば、新勾當内侍に持たせられて、童部の踏みあけたる築地の崩れより、女房の姿にて忍び出でさせ給ふ。景繁兼てより用意したることなれば、主上をば寮の御馬に昇き乗せまゐらせ、三種の神器を自ら荷擔して、未だ夜の中に大和

梨間宿
山城國綴喜郡奈島

上北面
北面は院の所の守護兵。それに上下あり。

夫
人夫。

路にかゝりて、梨間宿までぞ落しまゐらせける。

白晝に南都をかくの如くにて通らせ給はば、人の怪しめ申す事もこそあれとて、主上をば怪しげなる張輿に召しかへさせまゐらせて、供奉の上北面共を輿昇になし、三種の神器をば足つきたる行器に入れて、物詣する人の破籠など入れて持たせたるやうに見せて、景繁夫になつてこれを持つ。いづれも皆習はぬわざなれば、急ぐとすれども行きやらで、その日の暮程に内山までぞ著かせ給ひける。

こゝまでも若し敵の追蒐けまゐらす事もやあらんずらんと安き心もなかりければ、今夜如何にもして吉野の邊までなしまゐらせんとて、こゝより寮の御馬をまゐらせたれども、八月二十八日の夜の事なれば道いと暗くして行くべきやうもなかりけるところに、俄に春日山の上より金峯山の嶺まで、光物飛びわたる勢に見えて、松明の如くなる光よもすがら天を輝かし地を照しける間、行路分明に見え

賀名生

吉野郡丹生川の末にある。

て程なく夜の曙に、大和國賀名生といふ所へぞ落ち著かせ給ひける。

清見原天皇
第四十代天武天皇
大友皇子
第三十九代弘文天皇
藏王權現
金剛藏王權現といふ。役行者一千日、金峯山に練行して感得した釋迦如来の變化身といふ。
小守勝手明神
奉馬子芳野水

この處の有様里遠くして人煙幽に、山深くして鳥の聲も稀なり。柴といふ物を圍ひて家とし、芋野老を掘つて世を渡るばかりなれば、皇居になすべき所もなく、供御に備ふべきその儲も尋ね難し。かくては如何にあるべきなれば、吉野の大衆を語らひて君を入れまゐらせんと思ひて、景繁則ち吉野へ行きむかひ、當寺の宿老吉水法院にこの由を申しければ、滿山の衆徒を語らひ藏王堂に集會して僉議しけるは、古へ清見原天皇、大友皇子に襲はれこゝに御幸なりしも、程なく天下太平を致さる。その先蹤について今仙躡を促さるゝこと衆徒何ぞ異議に及ぶべけんや。就中昨夜の光物臨幸の道を照す、これ併しながら當山の鎮守藏王權現、小守勝手大明神、三種の神器を擁護し萬乗の聖主を鎮衛し給ふ瑞光なり。暫くも猶豫あるべからずとて、若大衆三百餘人皆甲冑を帶して御迎ひにぞ参りける。このほか楠

帶刀正行・和田次郎・眞木定觀・三輪西阿・紀伊國には、恩地・牲河・貴志・湯淺
五百騎三百騎引きも切らず面々馳せ参りける間、雲霞の勢を腰輿の
前後に圍ませて、程なく吉野へ臨幸なる。春雷一たび動く時、蟄蟲萌
蘇する心地して、聖運忽ちに開けて、功臣既に顯はれぬと、人皆歡喜の
思をなす。

一四 後醍醐天皇崩御

さるほどに延元三年八月九日より、吉野の主上御不豫の御事あり
けるが次第に重らせ給ふ。醫王善逝の誓約も祈るにその驗なく、耆
婆・扁鵲が靈藥も施すにその驗おはしまさず。玉體日々消えて晏
駕の期遠からじと見えたまひければ、大塔忠雲僧正御枕に近づき奉
りて、泪を抑へて申されけるは、「神路山の花復び開くる春を待ち、石清
水の流途に澄むべき時あらば、さりとも佛神三寶も捨てまゐらせら

分業神、新雨也
(續日本紀卷一、
文武天皇二年四
月)
流水を疏通分配
する神、後世ミ
カマリを祀りて
ミコモリとなし
途に子守神と
稱し、子守神と
育つる神として
信仰するに至つ
た。
春雷一たび動
く時云々
開春始雷、則蟄
蟲動矣。
(呂氏春秋)

耆婆
釋迦時代、印度
の名醫。
扁鵲
支那戰國時代の
名醫。
晏駕
天子の崩御。

三明

過去世を知る明
未來世を知る明
現在の相を知つ
て煩惱を斷絶す
る明。

妻子珍寶云々
大集經卷十六の
偈。
秦の穆公云々

秦穆公卒、從死
者百七十七人、
秦良臣子與氏三
人、名曰：奄息、
仲行、鍼虎、亦在
從。死之中、秦
人哀之。
(史記秦本紀)

第七宮

義良親王。

中流に船を覆
して云々
中流失船一壺

後醍醐天皇の崩御

る、事は、よも候はじとこそ存じ候ひつるに、御脈已に變らせ給ひて
候由、典藥頭驚き申し候へば、今は偏に十善の天位を捨て、三明の覺
路に赴かせ候ふべき御事をのみ思召し定められ候べし。さても、最
期の一念に依つて三界に生を受く。と經文に説かれて候へば、萬歳
の後の御事よろづ叡慮に懸り候はん事をば悉く仰せ置かれたまひ
て、後生善所の望をのみ叡心に懸けられ候べし。と申されたりければ
主上苦しげなる御息を吐かせたまひて、「妻子珍寶及王位、臨命終時不
隨者。これ如來の金言にして、平生朕が心にありし事なれば、秦の穆
公が三良を埋み、始皇帝の寶玉を隨へし事、一も朕が心に取らず。只
生々世々の妄念ともなるべきは、朝敵を悉く滅して四海を泰平なら
しめんと思ふばかりなり。朕即ち早世の後は、第七宮を天子の位に
即け奉りて賢士忠臣事を謀り、義貞・義助が忠功を賞して子孫不義の
行なくば、股肱の臣として天下を鎮むべし。これを思ふ故に、玉骨は

鳥郷にあつた寺の名。
配立 手勢のまくばり。

平泉寺 延暦寺の末寺。越前國。

走木 木をすべらせて投げやること。又その木。

て、まづ對城をぞ取られける。かねての配立には前なる兵は城に向ひあうて合戦を致し、後なる足輕は櫓をかき、堀を塗つて、對城を取りすましたらんずるのち、漸々に攻め落すべし」と議定せられたりけるが、平泉寺の衆徒のこもりたる藤島の城以ての外に色めき渡つてやがて落つべく見えける内、數萬の寄手是に機を得て、まづ對城の沙汰をさしおき、堀に着き堀につかつて、をめき叫んで攻め戦ふ。衆徒も落色に見えけるが、とても遁るべき方のなき程を思ひ知りけるにや、身命を捨て、これを防ぐ。官軍楯を覆して入らんとすれば、衆徒走木を出して突落す。衆徒橋を渡つて討つて出づれば、寄手の官軍鋒を揃へて斬つて落す。追ひつ返しつ入れかはる戦に、官軍おし移つて、日已に西に沈まんとす。

大將義貞は燈明寺の前にひかへて、手負の實檢しておはしけるが藤島の戦強くして官軍やゝもすれば追つ立てらるゝ體に見えける

黒丸の城 越前國吉田郡藤島郷にあつた城。
細川出羽守 義貞。
觀面 目の前に。

千鈞の弩 千鈞之弩不_レ爲_レ萬_レ石之鎗不_レ以_レ三尺挺_レ起_レ香_レ（魏志）
名譽の駿足 名高い駿馬。

間安からぬことに思はれけるにや、馬に乗替へ、鎧を着かへて、わづかに五十餘騎の勢を相從へ、路をかへ、畔を傳ひ、藤島城へぞ向はれける。其の時黒丸の城より細川出羽守鹿草彦太郎の兩大將にて藤島城を攻めける寄手どもを追ひ拂はんとて、三百餘騎の勢にて横啜を廻りけるに、義貞觀面に行遇ひ給ふ。細川が方には歩立にて楯をついたる射手ども多かりければ、深田に走り下り、前に持つ楯を衝き雙べて鎌を支へて散々に射る。義貞の方には射手の一人もなく、楯の一帖をも持たせざれば前なる兵義貞の矢面に立塞つて、ただ的になつてぞ射られける。

中野藤内左衛門は義貞に目加して、千鈞の弩は鼯鼠のために機を發せず」と申しけるを義貞きゝもあへず、士を失つてひとり免るゝは我が意にあらず」といひて、なほ敵の中へ懸け入らんと、駿馬に一鞭を進めらる。此の馬名譽の駿足なりければ、一二丈の堀をも前には輒

く越えけるが五筋まで射たてられたる矢にや弱りけん、小溝一つを越えかねて、屏風を倒すが如く岸の下にぞころびける。義貞弓手の足をしかれて起きあがらんとし給ふ處に、白羽の矢一筋眞向のはづれ、眉間の眞中にぞ立つたりける。

急所の痛手なれば、一矢に目くれ、心迷ひければ、義貞今は叶はじとや思ひけん、抜いたる太刀を左の手に取渡し、自ら頭をかき切つて深泥の中に藏して、其の上に横はつてぞ伏し給ひける。越中國の住人氏家中務、丞重國畔を傳うて走り寄り、其の首を取つて鋒に貫き、鎧・太刀・刀同じく取り持つて、黒丸の城へ馳せ歸る。義貞の前に暇を阻て戦ひける結城上野介・中野藤内左衛門尉・金持太郎左衛門尉此等馬より飛び下りて、義貞の死骸の前に跪きて、腹かき切つて重なり臥す。此の外四十餘騎の兵皆堀溝の中に射落されて敵の一人をも得ず、犬死してこそ伏したりけれ。此の時左中將の兵三萬餘騎皆猛く

金持
名は重興。

左中將
義貞。

勇める者どもなれば、身にかはり命にかはらんと思はぬ者はなかりけれども、小雨まじりの夕霧に誰を誰とも見分かねば、大將の自ら戦ひ討死し給ふを知らざりけるこそ悲しけれ。唯よそにある郎等が、主の馬に乗り替へて河合をさして引きけるを、數萬の官軍遙かに見て、大將の跡に隨はんと、見定めたる事もなく、心々にぞ落ち行きける。此の人、君の股肱として武將の位に備はりしかば、身を慎しみ命を全うしてこそ、大義の功を致さるべかりしに、自らさしもなき戰場に赴いて、匹夫の鏑に命を止めし事、運の極めとはいひながら、うたてかりし事どもなり。

軍散じて後、氏家中務丞、尾張守の前にまいつて、重國こそ新田殿の御一族かとおぼしき敵を討つて、首を取つて候へ。誰とは名乗り候はねば、名字をば知り候はねども、馬・物の具の様相従ひし兵どもの屍骸を見て腹を切り討死を仕り候ひつる體、何様尋常の葉武者にては

尾張守
足利高經
敵軍の大將

あらしと覺えて候ふ。これぞ其の死人の肌に懸けて候ひつる守にて候ふ。とて、血をも未だ洗はぬ首に、土のつきたる金欄の守を副へてぞ出したりける。尾張守此の首をよく見たまひて、あな不思議や、新田左中將の顔付に似たる所あるぞや。若しそれならば、左の眉の上に矢の疵あるべし。とて、自ら鬢櫛を以て髪をかきあげ、血を濯ぎ、土を洗ひ落してこれを見給ふに、果して左の眉の上に疵の跡あり、是に彌心づきて、帶かれたる二振の太刀をば取り寄せて見給ふに、金銀を延べて作りたるに、一振には銀を以て金膝纏の上に鬼切といふ文字沈めたり。一振には銀を以て銀脛巾の上に鬼丸といふ文字を入らる。是は共に源氏重代の重寶にて、義貞の方に傳へたりと聞ゆれば、末々の一族共の帶くべき太刀にはあらずと見るに、彌怪しければ、膚の守を開いて見たまふに、吉野の帝の御宸筆にて、朝敵征伐、事淑慮所向、偏在義貞武功、選未求他、殊可運、早速之計、略者也。とあそ

膝纏(脛巾)
柄の承口に裝置して、鏝元を固める器具

往生院
越前國

ばされたり。さては義貞の首相違なかりけり。とて、死骸を輿に乗せ、時衆八人にかゝせて、葬禮の爲に往生院へ送られ、首をば朱の唐櫃に入れ、氏家中務を副へて、潜かに京都へ上せられけり。

二六 藤井寺の合戦

楠帶刀正行は、父正成が先年湊川へ下りし時、思ふやうあれば、今度の合戦に我は必ず討死すべし。汝は河内へ歸つて、君の如何にもならせ給はんずる御様を見はてまゐらせよ。と申し含めしかば、其の庭訓を忘れず、此の十餘年我身のひとなるを待ち、討死せし郎従どもの子孫を扶持して、如何にもして父の敵を亡ぼし、君の御憤をやすめ奉らんと、明暮肺肝を苦めてぞ思ひける。

光陰過ぎ安ければ、年積つて正行已に二十五、今年は殊更父が十三年の遠忌に當りしかば、供佛施僧の作善所存の如く致して、今は命惜

庭訓
家庭の訓へ。
こゝでは父の教訓。

住吉・天王寺
大阪の南部。

將軍
足利尊氏。

八月十四日

正平二年。

藤井寺

大阪府南河内
郡。

譽田八幡

大阪府南河内
郡。

しとも思はざりければ、其の勢五百餘騎を率し、時々住吉天王寺邊へ打出で、中島の在家少々焼拂つて、京勢や懸ると待ちたりけり。將軍これを聞きて、楠が勢の分際思ふに、さこそあらめ。是に邊境を侵し奪はれて、洛中驚き騒ぐ事、天下の嘲弄武將の恥辱なり。急ぎ馳向つて退治せよ。とて、細川陸奥守顯氏を大將にて、宇都宮三河入道佐々木六角判官村田・奈良崎・菅家の一族共都合三千餘騎、河内國へ差し下さる。此勢八月十四日の午の刻に藤井寺にぞ着いたりける。此の陣より楠が館へは七里を隔てたれば、縦令急々に寄するとも明日か明後日かの間にぞ寄せんずらんと京勢油斷して、或は物具を解きて休息し、或は馬の鞍をおろして休める處に、譽田八幡宮の後なる山陰に、菊水の旗一旒ほの見えて、ひた胃の兵七百餘騎、閑々と馬を歩ませて打寄せたり。すはや敵の寄せたるは。馬に鞍置け物具せよとひしめきいろめく處へ、正行眞前に進んで喚いて懸る。大將細

川陸奥守、鎧をば肩に懸けたれども未上帶をもしめえず、太刀を帶ぐべき隙もなく見え給ひける間、村田の一族六騎小具足ばかりにて、誰が馬ともなくひたくと打乗つて、雲霞の如く群つて控へたる敵の中へかけ入つて、火を散らしてぞ戦うたる。されどもつづく御方なければ、大勢の中に取籠められ、村田の一族六騎は一所にて討たれにけり。其の間に大將も物具固め馬に打乗つて、相従ふ兵百餘騎暫し支へて戦うたり。敵は小勢なり、御方は大勢なり。縦令進みて勢合するまではなくとも、引退く兵だになかりせば、此の軍に京勢總て負くまじかりけるを、四國中國より驅集めたる葉武者、前に支へて戦へば、後には捨鞭を打つて引きける間、力なく大將も猛卒も同じやうにぞ落ち行きける。勝に乗つて関を作り懸け、追ひける間、大將已に天王寺渡部の邊にては危く見えけるを、六角判官舍弟六郎左衛門返合せて討たれにけり。また赤松信濃守範資、舍弟筑前守三百餘騎

捨鞭
馬にて駈け去る
時、鞭うつこと

命を名に替へて討死せんと、取つては返し取つては返し、七八度まで踏留まつて戦ひけるに、奈良崎も主従三騎討たれぬ。粟生田小太郎も馬を射られて討たれにけり、これ等に度々支へられて、敵さままで追はざりければ、大將も士卒も危き命を助かりて皆京へぞ歸り上りにける。

二七 住吉の合戦

九月十七日
正平二年。

去ぬる九月十七日、河内國藤井寺の合戦に、細川陸奥守顯氏甲斐なく打負け引退きし後、楠帶刀左衛門正行勢機に乗つて邊境常に侵し奪はるといへども、年内は寒氣甚しくして兵皆指を墮し手がまることありぬべければ、暫しとて擱かれけるが、さのみ延引せば敵に勢つきぬべしとて、十一月二十三日に軍評定あつて、同二十五日、山名伊豆守時氏・細川陸奥守顯氏を兩大將にて、六千餘騎を住吉・天王寺へ差

下さる。

顯氏は去ぬる九月の合戦に、楠帶刀左衛門正行に打負けて天下の人口に落ちぬること、生涯の恥辱なりと思はれければ、四國の兵どもを召集めて、今度の合戦復先のごとくして歸りなば、萬人の嘲弄たるべし。相構へて面々身命を輕んじて以前の恥を雪がるべしと衆を勇め氣を勵まされければ、坂東坂西・藤・橘・伴の者ども五百騎づゝ一揆を結んで、大旗小旗下濃の旗三旒立て、三手に分け、一足も引かず討死すべしと、神水を飲みてぞ打立ちける。事のおざろ實に思ひ切つたる體かなと先づ涼しくぞ見えたりける。

大手の大將山名伊豆守時氏千餘騎にて住吉に陣を取れば、搦手の大將細川陸奥守顯氏八百餘騎にて天王寺に陣を取る。楠帶刀正行是を聞いて、敵に足をためさせて、住吉・天王寺兩所に城郭を構へられなば、神に向ひ佛に向ひ弓を引き矢を放つ恐ありぬべし。不日に打

おざろ(蹟)
廣大深奥なること。

ためさせて
とめさせて。

寄せて先づ住吉の敵を追拂ひ、唯攻めにせめ立て、急に追懸くる程ならば、天王寺の敵は戦はで引退きぬとおぼゆるぞ」とて、同二十六日の曉天に、五百餘騎を率し、先づ住吉の敵を追出さんと、石津の在家に火をかけて、瓜生野の北より押寄せたり。山名伊豆守是を見て、敵一方よりよも寄せじ。手を分けてあひ戦へとて、赤松筑前守範貞に攝津・播磨兩國の勢を差副へて、八百餘騎濱の手を防がんと、住吉の浦の南に陣を取る。土岐周濟房・明智兵庫助・佐々木四郎左衛門、其の勢三千餘騎にて、安部野の東西兩所に陣を張る。搦手の大將細川陸奥守は、手勢の外四國の兵五千餘騎を率して態と本陣を離れず、新手に入替はらん爲に天王寺に控へたり。大手の大將山名伊豆守・舍弟三河守・原四郎太郎・同四郎三郎千餘騎にて、唯今馬煙をあげて進みたる先駟の敵に懸合せんと、瓜生野の東にかけ出でたり。

楠帶刀は敵の馬煙を見て、陣の在所四箇所にありと見てければ、多

源秀
正氏の子。
洗皮
薄紅色の柔かな
なめし革で織し
たもの。

からぬ我勢を數多に分たばなか／＼悪しかるべしとて、もと五手に分けたりける二千餘騎の勢を唯一手に集めて瓜生野へ打つてかゝる。この陣東西南北野遠くして匹馬の蹄を勞せしかば、兩陣互に射手を進めて鬨の聲を一聲揚ぐる程こそあれ、敵味方六千餘騎一度に颯と懸合つて思ひ／＼に相戦ふ。半時ばかり切合つて互に勝鬨をあげ、四五町が程兩方へ引分れ、敵御方を見渡せば、兩陣過半滅びて死人戦場に充ち満ちたり。又大將山名伊豆守、切創射疵七所まで負はれたれば、兵前に立隠して疵をすひ血を拭ふほど、少し猶豫したる處へ、楠が勢の中より年の程二十ばかりなる若武者、和田新發意源秀と名のつて、洗皮の鎧に、大太刀小太刀二振帶いて六尺餘の長刀を小脇に挟みしづ／＼と馬を歩ませて小歌謠ひて進みたり。その次に一人、是も法師武者の長七尺餘もあらんと覺えたるが、阿間了願と名のつて、唐綾威の鎧に小太刀帶いて、柄の長さ一丈ばかりに見えたる鎗

を馬の平頸に引副へて少しも擬議せず懸出でたり。其の勢、事から尋常の者にはあらずと見えながら後に續く勢なければ、あれやとばかりいひて山名が大勢さしも驚かて控へたる中へ、唯二騎つと懸入つて前後左右を突いて廻るに、籠手のはづれ、臙當のあまり、天邊の直中内胃一分もあきたる所をはづさず、やにはに三十六騎突落して大將に近づかんと目をくばる。三河守是を見て、一騎合ひの勝負は叶はじとや思はれけん。大勢を以て是を取籠めよと、百四五十騎にて横合にかけられたり。楠又是を見て「和田討たすな續けや」とて、相懸にかゝつて攻戦ふ。太刀の鐔音天に響き、汗馬の足音地を動かす。互に味方を恥しめて、引くな進めといふ聲に退く兵なかりけり。

されど大將山名伊豆守、已に疵を被り又入替る味方の勢はなし、叶ふべしとも覺えざりければ、歩立なる兵共伊豆守の馬の口を引向けて、後陣の味方と一緒にならんと天王寺をさして引退く。楠いよい

よ氣に乗つて、追懸け、攻めける間、山名三河守、原四郎、太郎、同四郎、次郎兄弟二騎、大飼六郎主従三騎、返へし合せて討たれにけり。二陣に控へたる土岐周濟坊、佐々木六郎左衛門三百餘騎にて、安部野の南にかけ出で暫し支へて戦ひけるが、目賀田・馬淵の者共三十八騎一所に討たれにける間、此の陣をも破られて共に天王寺へと引きさる。一陣二陣かくの如くなりしかば、濱の手も天王寺の勢も、大河後にあり兩陣前に破られぬ。敵に橋を引かれなば一人も生きて歸る者あるべからず。先づ橋を警固せよとて、渡邊をさして引きけるが、大勢の靡き立ちたる習にて、一度も更に返し得ず、行先狭き橋の上を、落つともいはずせき合ひたり。山名伊豆守は、我身深手を負ふのみならず、馬の三頭を二太刀切られて馬は弱りぬ。敵は手繁く追懸くる。今は落延びじとや思はれけん、橋詰にて已に腹を切らんとせられけるを、河村山城守唯一騎返合せて近づく敵二騎切つて落し、三騎に手

三頭
馬の臀部。

守木
子守が背の子を
襲かけさす木。

を負はせて、暫し支へたりける間、安田彈正走寄つて、如何なる事にて候ぞ。大將の腹切る所にては候はぬものを。といひて、己が六尺三寸の太刀を守木になし、鎧武者を鎧の上に掻い負ひて、橋の上を渡るに、守木の太刀にせき落されて水に溺るゝ者數を知らず。播磨國の住人小松原刑部左衛門は、主の三河守討たれたる事をも知らず、天神の松原まで落延びたりけるが、三河守の乗り給ひたりける馬の平頸二太刀切られて放れたりけるを見て、さては三河守殿は討たれたまひけり。落ちては誰が爲に命を惜しむべき。とて唯一騎天神の松原より引返し、向ふ敵に矢二筋射懸けて腹搔切つて死しにけり。其の外、の兵ども、親討たるれども子は知らず、主討死すれども郎從是を助けず。物具を脱捨て弓を杖に突いて夜中に京へ逃上る。見苦しかりし有様なり。

二八 正行吉野へ参向

安部野の合戦は、霜月二十六日のことなれば、渡邊の橋よりせき落されて流るゝ兵五百餘人、かひなき命を楠に助けられて河より引上げられたれども、秋の霜肉を破り、曉の氷膚にむすんで、生くべしとも見えざりけるを、楠情ある者なりければ、小袖を脱ぎ替へさせて身を暖め、藥を與へて疵を療せしむ。かくの如く四五日皆いたはりて、馬に乗るものには馬を引き、物具失へる人には物具をきかせて色代してぞ送りける。されば敵ながら其の情を感じる人は、今日より後心を通ぜんことを思ひ、其の恩を報ぜんとする人はやがて彼の手に屬して後、四條暖の合戦に討死をぞしける。

さて今年兩度の合戦に京勢無下に打負けて、畿内多く敵のため、に侵し奪はれ、遠國又蜂起しぬと告げければ、將軍左兵衛督の周章、唯

色代
會釋、挨拶。禮
遇すること。

四條暖
河内國。

左兵衛督
足利直義。

熱湯にて手を濯ふが如し。今は末々の源氏國々の催勢などを向けては叶ふべしとも覺えずとて、執事高武藏守師直、越後守師泰兄弟を兩大將にて、四國・中國・東山・東海二十餘箇國の勢をぞ向けられる。軍勢の手分け事定つて未だ一日も過ぎざるに、越前守師泰は手勢三千餘騎を率して十二月十四日の早旦に先づ淀に着く。是を聞いて馳せ加はる人々その勢二萬餘騎、淀邊の在家に居餘つて堂舎佛閣に充ち満ちたり。同二十五日武藏守、手勢七千餘騎を率して八幡に着く。此の手に馳せ加はる人々は、細川阿波將監清氏をはじめ源氏二十三人、外様の大名四百三十六人、都合其の勢六萬餘騎、八幡・山崎・眞木・葛葉・櫻井・水無瀬に充滿せり。

京勢雲霞のごとく淀八幡に着きぬと聞えしかば、楠帶刀正行・舍弟正時一族打連れて十二月二十七日吉野の皇居に參じ、四條中納言隆資をもつて申しけるは、父正成たけむすね、かよわし。、多病。、危弱。の身を以て大敵の威を碎き先朝

危きを見て
子張曰、士見危
 致命、見得思
 義、(論語子張
 篇)

有待の身
凡夫の身。

の宸襟を休めまゐらせ候ひし後、天下程なく亂れて逆臣西國より攻め上り候間、危きを見て命を致す處かねて思ひ定め候ひけるかに依つて、遂に攝州湊川にして討死仕り候ひ了んぬ。其の時正行十三歳に罷りなり候ひしを、合戦の場へは伴はで河内へ歸し、『死残り候はずる一族を扶持し、朝敵を亡ぼし君を御代に即け進せよ。』と申し置き死して候。然るに正行正時已に壯年に及び候ひぬ。此の度我と手を碎き合戦仕り候はずば、且は亡父の申し、遺言に違ひ且は武略のいふかひなき謗に落つべく覺え候。有待の身思ふに任せぬ習にて、病に冒され早世仕る事候ひなば、唯君の御爲には不忠の身となり父の爲には不孝の子となるべきにて候間、今度師直師泰に懸合ひ、身命を盡し合戦仕つて彼等が首を正行が手に懸けて取り候か、正行正時が首を彼等に取りられ候か、其の二つの中に戦の雌雄を決すべきに候へば、今生にて今一度君の龍顔を拜し奉らん爲に參内仕つて候。』と

申しもあへず涙を鎧の袖にかけて義心其の氣色に顯れければ傳奏未だ奏せざる先にまづ直衣の袖をぞぬらされける。

主上則ち南殿の御簾を高く捲かせて龍顏殊に麗しく諸卒を照臨あつて正行を近く召して以前兩度の戦に勝つことを得て敵軍に氣を屈せしむ。叡慮先づ憤を慰する條累代の武功返すくも神妙なり。大敵今勢を盡して向ふなれば今度の合戦天下の安否たるべし進退度に當り變化機に應ずることは勇士の心とする處なれば今度の合戦手を下すべきにあらずといへども進むべきを知つて進むは時を失はざらんが爲なり。退くべきを見て退くは後を全うせんが爲なり。朕汝を以て股肱とす。慎んで命を全うすべし。と仰出されければ正行頭を地につけて兎角の勅答に及ばずたゞ是を最期の参内なりと思定めて退出す。

正行正時和田新發兼舍弟新兵衛以下今度の軍に一足も引かず一

處に討死せんと約束したりける兵百四十三人先皇の御廟に参つて今度の軍難儀ならば討死仕るべき暇を申して如意輪堂の壁板に各名字を過去帳に書連ねてその奥に

返らじとかねて思へば梓弓

なき數にいる名をぞとゞむる

と一首の歌を書留め逆修のためと思しくて各鬢髪を切つて佛殿に投入れ其の日吉野を打出で敵陣へぞ向ひける。

逆修

生前豫め死後の佛事を修めること。

二九 四條畷の合戦

師直師泰は淀八幡に越年して猶諸國の勢を待ち調へて河内へは向ふべしと議しけるが楠已に逆寄せにせんために吉野へ参つて暇申し今日河内の往生院に着きぬと聞えければ師泰先づ正月二日淀を立つて二萬餘騎和泉の堺の浦に陣を取る。師直も翌三日の朝八

正月二日

正平三年。

鳥雲の陣

太公曰、凡三軍處山之高、則爲敵所、因既以被山而處、必爲鳥雲之陣。(六韜)

飯盛山

四條畷の東方に時つ

尾崎

山の張り出た處。

生駒

飯盛山の南方に連る。

幡を立てて六萬餘騎四條畷に着く。此の儘聽て相近づくべけれども、楠定めて難所を前に當てゝぞ相待つらん。寄せては悪しかるべし寄せられては便あるべしとて、三軍五所に分れ、鳥雲の陣をなして陰に設け陽に備ふ。白旗一揆の衆には縣下野守を旗頭として其の勢五千餘騎、飯盛山に打上りて南の尾崎に控へたり。大旗一揆の衆には、河津・高橋二人を旗頭とし其の勢三千餘騎、秋篠や外山の峯に打上つて東の尾崎に控へたり。武田伊豆守は千餘騎にて、四條畷の田中に、馬の懸場を前に殘して控へたり。佐々木佐渡の判官入道は二千餘騎にて、生駒の南の山に打上り、面に疊楯五百帖突竝べ、足輕の射手八百人馬よりおろして、打つて上る敵あらば馬の太腹射させて猶豫する處あらば眞倒に懸落さんと、後に馬勢控へたり。大將武藏守師直は二十餘町ひきおくれて將軍の御旗の下に輪違の旗打立てゝ、前後左右に騎馬の兵二萬餘騎、馬廻に徒立の射手五百人、四方十餘町を

項羽が山を抜く力

項王乃悲歌慷慨自爲詩曰、力拔山兮氣蓋世云々。(史記項羽記)
魯陽が日を返す勢
魯陽公與韓、韓、戰、韓、方、韓、授、之、而、推、之、日、爲、之、反、三、舍。(淮南子)

相支へて稻麻の如く打圍みたり。手分の一揆互に勇争つて、陣の張様厳しければ、項羽が山を抜く力、魯陽が日を返す勢ありとも、此の堅陣に懸入つて戦ふべしとは見えざりけり。
去程に正月五日の早旦に、先づ四條中納言隆資卿大將として、和泉紀伊國の野伏二萬餘人引具して色々の旗を手々に差上げ飯盛山にぞ向ひ合ふ。是は大旗小旗兩一揆を籠へおろさで、楠を四條畷へ寄せさせんための謀なり。案の如く大旗小旗の兩一揆、是を誑勢とは知らず、是ぞ寄手なるやらんと心得て、射手を分け旗をすゝめて坂中までおり下つて嶮岨に待つて戦はんと見繕ふ處に、楠帶刀正行・舍弟正時・和田新兵衛高家・舍弟新發意賢・秀究竟の兵三千餘騎を率して霞隱より蕎麥地に四條畷へ押寄せ、先づ斥候の敵を懸散さば大將師直に寄せ合せて、なか勝負を決せざらんと少しも擬議せず進んだり。縣下野守は白旗一揆の旗頭にて、遙の峯に控へたりけるが、菊水の旗唯一

旒、是非なく武藏守の陣へ懸入らんとするを見て、北の岡より馳下り馬よりひたくと飛下りて、唯今敵の驀地に懸入らんとする道の末を一文字に遮つて東西に颯と立ちわたり、徒立になつてぞ待懸けたる。勇氣もつとも盛なる楠が勢、僅に徒立なる敵を見て何故か些もやすらふべき。三手に分けたる前陣の勢五百餘騎、しづくと打つてかゝる。京勢の中、秋山彌次郎・大草三郎左衛門二人、眞先に進んで射落さる。居野七郎是を見て、敵に氣を附けじと、秋山が伏したる上をつと飛越えて爰をあそばせと、射向の袖を敲いて小跳して進んだり。敵東西より差合せて雨の降る様に射る矢に、是も内兜草摺のはづれ二所、篋深に射られ太刀を倒につき、其の矢を抜かんとすくみて立ちたる所を、和田新發意つと駈寄つて、冑の鉢をしたゝかにうつ。打たれて犬居に倒れければ、和田が中間走寄つて首掻切つて差上げたり。是を軍の始として、楠が騎馬の兵五百餘騎と、縣が徒立の兵三

射向の袖
籠の左の袖。

犬居
犬の如く四つ道に倒るゝをいふ。

弊に乗つて
疲弊に乗じて。

百餘人と、喚き叫んで相戦ふに、田野ひらけ平にして馬の懸引自在なれば、徒立の兵汗馬に惱され、白旗一揆の兵三百餘騎大略討たれにければ、縣下野守も深手五所まで被つて叶はじと思ひけん、討殘されたる兵と師直の陣へ引いて去る。二番に戦ひ屈したる楠が勢を、弊に乗つて討たんとて、武田伊豆守七百餘騎にて進んだり。楠が二陣の勢千餘騎にてかゝり合ひ、二手に颯と分れて一人も餘さじと取籠むる。汗馬東西にはせ違ひ、追つ返しつ旌旗南北に開き分れて、卷つて巻くられつ互に命を惜まで、七八度まで揉合ひたるに、武田が七百餘騎殘すくなに討たるれば、楠が二陣の勢も大半疵を被つて、朱になつてぞ控へたる。小旗一揆の衆は、始より四條中納言隆資の僞つて控へたる見せ勢に對して、飯盛山に打上つて、大手の合戦をば徒によそに瞰下して居たりけるが、楠が二陣の勢の戦ひつかれて、麓に控へたるを見て、小旗一揆の中より長崎彦九郎資宗・松田左近將監重明以

下勝れたる兵四十八騎、小松原より懸下りて、山を後に當て敵を麓に瞰下して、懸合ひく戦ふに、楠が二陣千餘騎僅の敵に遮られず、みかねてぞ見えたりける。佐々木佐渡判官入道道譽は、楠が軍の疲足、推量るに自餘の敵にはよも目もかけじ。大將武藏守の旗を見てぞかゝらんずらん。さる程ならば少し遣り過し、後を塞いで討たんと議して、其の勢三千餘騎を率して飯盛山の南なる峯に打上つて旗打立て控へたりけるが、楠が二陣の勢の兩度數刻の戦に馬疲れ氣屈して少し猶豫したる處を見すまして、三千餘騎を三手に分けて同時に関をどつと作つてかけ下す。楠が二陣の勢暫く支へて戦ひけるが、敵は大勢なり味方は疲れたり、馬強なる新手に懸立てられて叶はじと思ひけん、大半討たれて残る勢、南をさして引いて行く。

元來小勢なる楠が兵、後陣既に破れて残り留まる前陣の勢僅に三百餘騎にも足らじと見えれば堪へじと見る處に、楠帶刀、和田新發

先手をまくり
手近き敵をまく
り立てる。
虎韜。龍鱗
ともに陣法。

意、未だ討たれずしてこの中にありければ、今日の軍に討死せんと思ひて、過去帳に入りたりし連署の兵百四十三人、一緒に犇々と打寄せ、て少しも後陣の破れたるをば顧みず、唯敵の大將師直は後にぞ控へてあるらんと、目に懸けてこそ進みけれ。武藏守が兵は、味方軍に打勝つて敵而も小勢なれば、機に乗り勇み進んで是を打取らんとて、先づ一番に細川阿波將監清氏、五百餘騎にて相當る。楠が三百騎の勢些も滞らず相懸りにかゝりて面も振らず戦ふに、細川が兵五十餘騎討たれて北をさして引退く。二番に仁木左京大夫頼章、七百餘騎にて入替つて攻むるに、又楠が三百餘騎轡を並べて真中に懸入り火を散して戦ふに、左京大夫頼章、四角八方へ懸立てられて一所へ又も打寄らず。三番に千葉介、宇都宮遠江入道、同三河入道、兩勢并せて五百餘騎、東西より相近づいて、手先をまくりて中を破らんとするに、楠敢て破られず。敵虎韜に連つて圍めば虎韜に分れて相當り、龍鱗に結

竹葉
酒の異名なれど
もこゝでは辨當
の意。

んでかゝれば龍鱗に進んで戦ふ。三度合せて三度分れたるに、千葉・宇都宮が兵若干討たれて引返す。此の時和田・楠が勢百餘騎討たれて、馬に矢の三筋四筋討たてられぬはなかりければ、馬を踏放して徒立になつて、とある田の畔に後を差當て、胡籐に差したる竹葉取出して心閑に兵糧つかひ、機を助けてぞ竝居たる。是程に思切つたる敵を取籠めて討たんとせば、味方の兵若干亡びぬべし。唯後をあけて落ちば落せ。とて、數萬騎の兵皆一處に打寄つて取巻く體をば見せざりけり。されば楠勢縦令小勢なりとも落ちば落つべかりけるを、初より、今度の軍に師直が首を取つてかへり參ぜずば正行が首を六條河原に曝されぬと思召され候へ。と吉野殿にて奏し申したりしかば、其の言をや恥ぢたりけん、又運命茲にや盡きけん、和田も楠も諸共に一足も後へは退かず、唯師直に寄合つて勝負を決せよ。と聲々に罵り呼ばはり靜に歩み近づきたり。是を見て武藏守の前後左右に控へ

鏝
かぶとの鉢の左
右及後方に垂れ
て首筋をおぼふ
もの。

たる究竟の兵共七千餘騎、我先に打取らんと喚き叫んでかけ出でたり。楠是に些も臆せずして暫く息繼がんと思ふ時は、一度に颯と竝居て鏝の袖をゆり合せ思ふやうに射させて、敵近づけば同時にはつと立ちあがり鋒をならべて跳りかゝる。一番に懸寄せける南次郎左衛門尉、馬の諸膝難がれて落つる處を、起しも立てず討たれにけり。二番に劣らじとかけ入りける松田次郎左衛門、和田新發意に懸合つて敵を切らんと差しうつぶく處を、和田新發意長刀の柄を取延べて、松田が冑の鉢をはたとうつ。打たれて鏝を傾くる處に内兜を突かれて馬より倒に落ちて討たれにけり。此の外目の前に切つて落さる、者五十餘人、小腕うち落されて朱になる者二百餘騎、追立て、攻められて、叶はじと思ひけん、七千餘騎の兵ども開き靡いて引きけるが、淀八幡をも馳過ぎて京まで逃ぐるも多かりけり。此の時もし武藏守一足も退く程ならば逃ぐる大勢に引立てられ洛中迄も追

目をいららけ
目をいからし。

ひつけられぬと見えけるを、少しも漂ふ氣色なくして大音聲を揚げて、「きたなし返せ、敵は小勢ぞ。師直こゝにあり、見捨て、京へ逃げたらん人何の面目あつてか將軍の御目にかゝるべき。運命天にあり名を惜まんと思はざらんや。」と目をいららげ齒嚼をして四方を下知せられけるにこそ、恥ある兵は引留りて師直の前後に控へけれ。かかる處に土岐周濟坊の手の者どもは皆打散らされ、我身も膝口切られて血にまじり、武藏守の前を引いてすげなう通りけるを師直きつと見て、「日來の荒言にも似ず、まさなうも見え候もの哉。」と言葉を懸けられて、「何か見苦しく候ふべき、さらば討死して見せ申さん。」とて、又馬を引返し敵の真中へかけ入つて終に討死してげり。是を見て雜賀次郎もかけ入り討死す。

すげなう
無愛想に。

已に楠と武藏守と、あはひ僅に半町ばかり隔つたれば、すはや楠が多年の本望爰に遂げぬと見えたる處に、上山六郎左衛門、師直の前に

馳塞り大音聲を揚げて申しけるは、「八幡殿より以來、源家累代の執權として武功天下に顯れたる高武藏守師直是にあり。」と名乗つて討死しける其の間に師直遙に隔つて楠本意を遂げざりけり。

執事
高師直。

逗留

ひま。
時間の餘裕。

抑多勢の中に上山一人、師直が命に代つて討死しける所存何事ぞと尋ぬれば、唯一言の情を感じて命を軽くしけるとぞ聞えし。唯今楠この陣へ寄すべしとは思ひよらず、上山閑に物語せんとして、執事の陣へ行きける處に、東西南北騒ぎ色めきて敵寄せたりと打立ちける間、上山我屋に歸り物具せん逗留なかりければ、師直がきせながの料に同じ毛の鎧を二領まで置きたりけるを、上山走寄つて唐櫃の緒を引切つて鎧を肩に打懸けけるを、武藏守が若黨鎧の袖を控へて、「是は如何なる御事候ぞ。執事の御きせながにて候ものを、案内をも申され候はで。」と云ひて奪止めんと引合ひける時、師直これを聞いて馬より飛んで下り、若黨をばはたと睨んで、「云甲斐なきもの、振舞かな。」

きせなが

鎧のこと。
大將の著る場合に特にいふことあり。

いしうも
よくも。

只今師直が命に代らん人々に、縦令千領萬領の鎧なりともなにか惜
かるべきぞ。こゝのけ」と制して、「いしうもめされて候ものかな」と却
つて上山を感ぜられければ、上山誠にうれしき氣色にてこの詞の情
を思入れたる其の心地、いはねど色に現れたり。されば事の儀を知
らずして鎧を惜みつる若黨は、軍の難儀なるを見て先づ一番に落ち
けれども、情を感ずる上山は、師直が其の命に代つて討死しけるぞ哀
れなる。

楠、上山を討つて、その首を見るに、太く清げなり。鎧を見るに輪違
を金物に彫透したり、さては子細なく武藏守を討つてげり。多年の
本意今日已に達しぬ。是を見よや人々」とて此首を宙に投上げては
請取り、請取つては手玉についてぞ悦びける。楠が弟の次郎走り寄
つて、如何にやあたら首の損じ候に、先づ旗の蟬本につけて敵味方の
者どもに見せ候はん」といひて、太刀の鋒に指貫き差上げて是を見る

金物
裾金物。

に、「師直にはあらず、上山六郎左衛門が首なり」と申しければ楠大に腹
立してこの首を投げて、上山六郎左衛門と見るはひが目か、汝は日本
一の剛の者かな。我君の御爲に無雙の朝敵なり。さりながらあま
りに剛に見えつるがやさしさに、自餘の首どもには混ずまじきぞ」と
て着たる小袖の片袖を引切つて、此の首を押包んで岸の上にぞさし
置きたる。

島田彌次郎膝口を射られすくみて立ちたりけるが、さては師直未
だ討たれざりけり。安からぬものかな。師直何處にかあるらん」と
いふ聲を力にして、内兜にからみたる鬢の髪を押し、のけ血眼になつ
て遙に北の方を見るに、輪違の旗一旒打立て清げなる老武者を大將
として七八十騎か程控へたり。いか様師直とぞ覺ゆる。いざかゝら
ん」といふ處に、和田新兵衛鎧の袖をひかへて、暫く思ふ様あり。餘り
に勇みかゝりて大事の敵を打漏すな。敵は馬武者なり、我は徒立な

り。追はば敵定めて引くべし。引かば何として敵を打取るべき。事の様を案ずるに、我等こらへで引退く眞似をせば、此の敵氣に乗つて追懸くべしと覺ゆるぞ。敵を近々と引寄せて其の中に是ぞ師直と思はん敵を、馬の諸膝難いで切据ゑ、落つる處にて細頸打落し、討死せんと思ふは如何に。」といひければ、打殘されたる五十餘人の兵共、此の議然るべしと一同して楯を後に引きかづき引退く體にぞ見せたりける。師直思慮深き大將にて、敵のたばかり引く處を推して、些も馬を動かさず、高播磨守西なる田中に三百餘騎にて控へたるが、是を見て引く敵ぞと心得て一人も餘さじと追懸けたり。元來剛なる和田・楠が兵なれば、敵の太刀の鋒の鎧の總角、兜の鍔二つ三つうち當る程近づけて、一同にとつと喚いて、磯打つ波の岩に當つて返るが如く取つて返し火出づる程ぞ戦ひける。高播磨守が兵共、引返すべき程の隙もなければ、矢庭に討たる者五十餘人散々に切立てられて馬

をかけ開いて逃げけるが、本陣をも馳過ぎて二十餘町ぞ引きたりける

三〇 正行の最期

さる程に師直と楠とが間一町ばかりになりけり。是ぞ願ふ所の敵よと見澄して、魯陽二度白骨を連ねて韓と難を構へ戦ひける心も、是には過ぎじと勇み悦んで千里を一足に飛んで懸らんと心ばかりは逸りけれども、今朝の巳の刻より申の時の終まで三十餘度の戦に息絶え氣疲るゝのみならず、深手浅手負はぬ者もなかりければ、馬武者を追詰めて討つべき様ぞなかりける。されど多くの敵共四角八方へ追散らして、師直七八十騎にて控へたれば、何程の事かあるべきと思ふ心を力にて、和田・楠・野田・關地・良圓・河邊・石掬丸、我先に／＼とぞ進みたる。餘りに辭理なく懸けられて、師直已に引色に見えける

魯陽 魯陽公與韓、難、戰、而、推、之、曰、爲、之、反、三、舍、(淮南子) 魯陽公は楚平王之孫、司馬子期之子也。

尻籠

古昔矢を盛る器
の總稱、後世粗
末なるやなぐひ
の特稱。矢窓

矢坪

矢をばなつ手頃
のねらひ場所

ふえ

喉吭のどぶえ

矢づくみに立

つ
矢のために身が
すくんで動かれ
ぬ。

處に九國の住人須々木四郎とて、強弓の矢つぎばや、三人張に十三束
二伏、百歩に柳の葉を立て、百矢をはづさぬ程の射手のありけるが、人
の解き捨てたる籠尻籠、胡籙を搔抱くばかり取集めて、雨の降るが如
く矢坪を指してぞ射たりける。一日着暖めたる物具なれば、あたる
と當る矢、籠深に立たぬはなかりけり。楠次郎眉間ふえのはづれ射
られて、抜く程の氣力もなし。正行は左右の膝口三所、右の頬さき、左
の目尻、籠深に射られて、其の矢、冬野の霜に伏したるが如く折れかゝ
りたれば、矢づくみに立ちてはたらかず。其の外三十餘人の兵ども
矢三筋四筋射立てられぬ者もなかりければ、今は是までぞ、敵の手に
かゝるな。とて楠兄弟刺違へ北枕に伏しければ、自餘の兵三十二人、思
ひ思ひに腹搔切つて上が上に重り伏す。

和田新發意如何して紛れたりけん、師直が兵の中に交りて、武藏守
に刺違へて死なんと近づきけるを、此の程河内より降参したりける

湯淺本宮太郎左衛門といひける者、是を見知つて和田が後へ立廻り
諸膝切つて倒るゝ所を、走り寄つて頸を搔かんとするに、和田新發意
朱を洒ぎたる如く大の眼を見開いて湯淺本宮をちやうと睨む。其
眼終に塞がずして湯淺に首をぞ取られける。大剛の者に睨まれて
湯淺臆してやありけん、其日より病つきて身心惱亂しけるが、仰げば
和田が忿りたる顔天に見え、俯けば新發意が睨める眼地に見えて、怨
靈五體を責めしかば、軍散じて七日と申すに、湯淺あがき死にぞ死に
にける。大塚掃部助手負ひたりけるが、楠猶後にありとも知らず、放
馬のありけるに打乗つて遙に落延びたりけるが、和田楠討たれたり
と聞きて、唯一騎馳歸り大勢の中へ懸入つて切死にこそ死ににけれ
和田新兵衛正朝は、吉野殿に参つて事の由を申さんとや思ひけん、
唯一人鎧一縮して歩立になつて太刀を右の脇に引側め、敵の首一つ
取つて左の手に提げて、東條の方へぞ落行きける。安保肥前守忠實

切死

敵を切りつゝ、戦
死する。

東條

河内郡。

貝しのぎ
鍋の稜立普通よ
りはふくらみて
珠に角立ちて子
貝に似たるより
名づく。

引合
鐵の右脇引合せ
目

唯一騎馳合ひて、和田・楠の人々皆自害せられて候ふに、見捨て、落ちられ候ふこそ情なく覺え候へ。返され候へ。見參に入らん」と詞をかければ、和田新兵衛打笑ひて、返すに難きことか」とて四尺六寸の太刀の貝しのぎに血の著きたるを打振つて走りかゝる。忠實一騎合の勝負叶はじこや思ひけん、馬をかけ開いて引返す。忠實留れば正朝又落つ。落行けば忠實又追懸け、追懸くれば止り、一里ばかりを過ぐるまで互に討たず討たれずして日已に夕陽に及ばんとす。かゝる處に青木次郎・長崎彦九郎二騎、箆に矢少し射殘して馳來る。新兵衛を懸退け、射ける矢に、草摺の餘引合の下、七筋まで射立てられて新兵衛遂に忠實に首をば取られにけり。

總て今日一日の合戦に、和田・楠が兄弟四人、一族二十三人相従ふ兵百四十三人、命を君臣二代の義に留めて、名を古今無雙の功に殘せり。先年奥州の國司顯家卿、安部野にて討たれ、武將新田左中將義貞朝臣

魚の水を得たる如く
君臣の親密なる
にいふ。三國志
に、先主曰、孤
之有孔明猶魚
之有水とあり。
虎の山による
虎負、嶋莫之敢
擧。(孟子)

越前にて亡びし後は、遠國に官方の城郭少々ありといへ共、勢未だ振はざれば今更驚くに足らず、唯此の楠ばかりこそ都近き切所に威を逞しくして、兩度まで大敵を靡かせぬれば、吉野の君も魚の水を得たる如く、叡慮を悦ばしめ、京都の敵も虎の山によりかゝる恐懼をなしつるに、和田・楠が一類皆片時に亡びはてぬれば、聖運已に傾きぬ。武徳誠に久しかるべしと思はぬ人もなかりけり。

太平記鈔勤王讀本 終

324

668

昭和四年十二月十日 印刷
昭和四年十二月十五日 發行

著作
權
所有

勤王讀本

發行所

編者

立川書店編輯部

發行者

立川熊次郎

印刷者

北隅茂

立川書店

大阪市南區安堂寺橋通三丁目四十五番地
番替口座(大)一四六一番

本店發行之教科書は常に多數の製本準備をしてありますから萬一各地賣捌所に賣切の場合課業に御差支の節は直接御注文下さい直ぐ御送り致します

定價金三拾八錢

終